昨年の史學地理學界

史學界

史學一般　文化主義や文化運動といふことが一般思想界の傾向並びに實際運動として近時、世の視聽を惹いて居る所から、文化の意義文化價値の問題を取扱うた論說が昨年度の諸雜誌を賑はして居るので、夫等は孰れもカントに源を發して居る獨逸新理想派の歷史哲學に觸れて居る考說に他ならないのである。文化の絕對的意義先天的價値を論じた「文化の絕對性」（桑木嚴翼、丁酉倫理講演集）同じく文化價値の問題文化哲學と批判哲學との關係歷史哲學社會學との交涉を說いた「文化哲學に就て」（同人、哲學雜誌）一般化的概念かる成る自然的世界に對し個別化的概念から成る文化的世界に於ける價値關係の方法論的研究たる「文化價値の論理的構造」（佐竹哲雄、同誌）の如きは特に注目すべき論文である。「歷史的因果律の問題」（三木清、哲學研究）は價値實現の過程たる歷史現象の必然性を論じ、其の因果律は普遍的個性たる神が內面的關係に於いて一切の特殊的個性を規定するものであるといふ見解を示して居る。「歷史的評價の標準に就いて」（同人、史林）は獨逸史學雜誌に載せられたErnst Troeltschの論文を紹介したもので、歷史論理學の思想に於いて、個性的經驗的知識の概念を、いかにして評價の標準選擇の原理となる目的及び價値の理想と結合せしむべきかを說きこれを內面的な自發性、先驗性を具へた直觀的思想に求めたものである。「歷史哲學の課題に就いて」（四宮兼之、哲學雜誌）はヴィンデルバンドが一九一六年カント研究の附錄として公にした歷史哲學の一部を抄譯したものである。「新理想主義の歷史哲學」後篇一、（米田庄太郎）はカントの歷史哲學に筆を起こして、フイヒテ、シエリング、ヘーゲルに亘る獨逸理想主義派の歷史哲學、ラムプレヒ

ト、プライシツヒ、バルト諸氏の自然科學的歴史觀、マイエル一派の記述史家が懷抱して居る歴史哲學的思想を究明せるもので、メーリスの紹介を旨とした前篇二冊と相俟ち斯界の研究者に資する所甚大なるものがあらう。ギルド社會主義者たるPentyが中世明の社會精神文化狀態を稱揚せる史的見解を紹介したる「アーサー・ペンティの歴史觀」(加田哲二、三田學會雜誌)は、歴史の科學的說明に對する懷疑思想を表明せる「ギイディングスの歴史學說」(野村兼太郎、同誌)と相並んで一顧の價値ある言說と稱すべきである。唯物史觀に關する論議は頓に寂寞を告ぐるに至つたやうではあるが、尙「唯物史觀研究」(河上肇)の一篇が學界に重きをなして居る。本書は勿論經濟論叢や社會問題研究に掲げられた在來の諸論文を飜譯紹介とを補訂纂輯したものに過ぎないけれども、マルクス史觀の解說及びこれに對する諸家の意見を紹介せるものとして唯物史觀の研究者に多大の便益を供するものである。就中「唯物史觀の要領」「史的唯物論略解」(ボルハルト)の二章の如き、簡明平易な叙說は最も一般讀書子を喜ばしむるものであらう。

我國の學界に緣故深きルード井ヒ・リース博士の近著「世界史」第一卷の緒論を最も忠實に飜譯せる「世界史の使命」(坂口昂、安藤俊雄共譯、史林)はランケの流風を傳ふる著者の史觀と其世界史に對する尊重すべき主張を披瀝したものである。史的考察歴史知識の尊重すべき所以と史實の統一的把捉が必要なる旨を高唱し、以て世界史の時代綜合的叙述(ジンクロニスチツシユ)といふ著者一流の主義理想を表明して居る點は最も注目に値ひすべきものであらう。「歴史と歴史學」(瀧本誠一、三田學會雜誌)はニーブール、ランケ等の執り來つた政治制度の徹底的考覈といふ態度とラムプレヒト等の社會心理的考察とを說き來つて、歴史家は須らく事實に對し大いに批判推斷を加へなければならない所以を主張して居り、「歴史と社會學との關係」(財部靜治經濟論叢)は普通史、歴史哲學、文明史の性質を說き其の社會學との交涉を論述して居るもので、共に平明懇切なる論議である。「希臘の二大史家」(田中萃一郎、史學)はヘロドタス、ツキヂデス兩史家の性質と其の歴史觀を叙說し

たもので、史學史上に於いて注意を促すべき一論文である。猶ほ雜誌『史學』が三田史學會より創刊された、吾人は其健全なる發展を望むものである。〔植村〕

國史　大正十年に於ける論著の中一般史に關するものは「國史總論」(內田銀藏、國史總論及日本近世史)を第一に擧ぐべきであらう。我國史を風土、人民、人口、對外關係政治及社會組織の進化、經濟の發達、國民の思想信仰と外來文化の諸項に分つて縱觀したもので、從來の一般史が時代によりて橫斷して居るに對して新しい試みである事は爭へない。次に社會史的方面より觀察を下したものが大分眼立つた。先づ「古代歌謠に就いての一考察」(阪倉篤太郎、歷史と地理)は記紀萬葉風土記の歌謠に就て古代の男女關係を考察し男子が同時に多婦を求め、女子は一夫のみを對象として自ら甘んじて居たのは、全く兩性間の性慾の相違に起因した當然の結果であつて、代を下るにつれて此肉的愛慾と靈的戀情との關係は自覺され、男女間の道義觀念も次第に形成されたのであると論じて居る。土地問題から考察したものでは「我國中古の班田收授

法及近時まで本邦中所々に存在せし田地定期割替の慣行に就きて」(內田銀藏、日本經濟史の研究)がある。班田收授法と後魏北齊後周及び隋唐の均田法とを比較して、支那のそれは調の負擔と相對應し、各戶の勞働力の多寡に應じて田を授けたものであるに對して、我國のそれは各戶の現在口數を標準とし其生活の必要に應じたものであるから、人年六歲以上に達すれば、當然田の班給を受けたのである。而して近時まで各地に存在せし田地定期割替の慣行を一々に就いて觀察して見ると中世班田制を淵源とすると言ふよりも、更に上古よりの固有の習俗であつて、大化改新前に班田制のあつたと認むべき積極的の徵證は全く缺けて居るけれども、それに多少類似した慣行が上古の聚落內に一般に行はれたと見る時、初めて班田收授法が圓滑に行はれた理由を說明し得べきであると論じて居り、更に其說を繼承して大化改新の意義を論じたものは「大化改新」(中村直勝、歷史と地理)である。以前に各地方地方に存在せし種々の土地制度を改良整理せしものと言ひ得べく、決して明治維新と相並べて國史上

の二大改革と言ふ事は出來まい、寧ろ武家政治の開始を以て我國過去に於ける社會改造と言ふべきであるとし、時代降りて平安朝に入りては「平安朝の京都」(櫻井秀、同誌)は上京下京の名目の既に平安朝期に慣用されたるを指摘し、左京の發展を誘致せし原因は水質風景による事の外に、右方よりも左方を尊び、左京に住む者の優先を承認する實際的事情も見逃す事が出來ないと言つて京都の形貌を論じたに對して、其社會の狀態を描き出した「檢非違使を中心としたる平安時代の警察狀態」(谷森饒男)は檢非違使の名は弘仁の初め市井に何等か糾彈すべき犯罪のあつた時、衞門府の一官人が檢非違使と稱して臨場した事から起つたのであらうから其創置年代の如き極めて曖昧なのは寧ろ當然であらう。使が權力を得たのは司獄司刑を預り裁判に關與して彈正臺の權利を收めたからであるとて其使廳の設置を促した社會を描き、當時の社會狀態及警察官の無能が使の出現を餘儀なくしたと言ひ「平安朝貴族の家庭生活」(阪倉篤太郎、歴史と地理)は蜻蛉日記によりて其著者右大將道綱母の家庭生活を描き模範的母型婦人の率直なる情的內面生活の告白を傳へ貴族の家庭の有樣や主婦の心遣を述べたものであるが、「平安朝の服飾變化と經濟生活との關係について」(櫻井秀、考古學雜誌)の一節に當時既に貴人にして公服を所持せざるものがあつた事を指摘せると併せ見て彼等の生活の一面を知るに充分である、更に鎌倉時代に移つては「鎌倉時代に於ける貴族生活」(同人、歴史と地理)は平安朝文化の頽廢期に接したる當代貴族生活の遊興化、趣味化せる事を指摘し、卿相の多くは時世を捨てゝ學藝に遁るゝか飲食に耽るかの他なかつたから、新なる境地を作るためには武士の勃興を必要としたとて時勢を瞥見し、上流家庭の室內遊興として新に行はれし白拍子を說き、其原始時代は音曲のみのものであつて舞は後に發生したのであらう、又庭上又は野外の興遊としては蹴鞠は殆んど完成せられ延年以下演藝類似のもの漸く起つたのであると言つて居る。風俗の方面に關して「心葉挿頭花及び日蔭蔓の起原」(高橋健自、考古學雜誌)は、幞頭式冠に附屬した是等の裝飾の起原を考察するには、其以前に遡つて被物及び頭部

に如何なる裝飾が行はれたかを見ねばならぬと言つて、髪華、鈿及び髮の三者の起原發達を考究し、心葉と挿頭花は共に花枝ではあるが、兩者は其起原を異にし心葉は支那傳來の冠の鈿より轉化し、挿頭花は原始時代以來の髪華の遺制であり、日蔭蔓は同名の蔓草に擬して作製されたもので頭髮の亂れを防ぐために起つた上古の髮の裝束的要素が發展したものであらうと推考し、「十二單なる俗稱について」(櫻井秀、同誌)は十二單とは決して中古に於ける女子の正裝を言ふものではなく衣十二領と單との意味であるから、女官及貴婦人の公服を呼ぶには他の名稱を用ふべきであつて、それは「物具」とでも言つた方が最も適當であると斷じたものと。「雛遊史考」(同人、歴史地理)は平安朝以來行はれた雛遊びは不定期性のものであつたが、それが定期性となつて三月上巳に奠祭化して飾られる事になつたのは、三月上巳祓禊の祓人形が玩具としての雛に近似した事にその接合點があるであらう、かくて慶安承應の頃より三月に、寛久延寶の時代より三日にと定期化したのであるが、さりとて享保以後に於て

も不定期性の風習はなほ存した、近世初頭に於てはなほ識見を重ずる一部堂上家間には三月雛遊を俗習であると看做されたものであると言つたのが先づ注意すべきものであらう。法制經濟の方面に於ては「貞永式目批判」(三浦周行、法學論叢)は天下の御法と稱せられ其立法的影響を江戸時代にまで及ぼしたる我法制史上の一偉產たる貞永式目が五十一個條を以て組立てられたる事は、聖德太子憲法十七ヶ條を天地人に配したるためであると言ふ式目抄の說を、確かに獨立の一條を立つるに足るべきものに拘らず然らざりし事よりして承認し、其排列を批判して立法者の相當の注意は認むべきも、往々妥當を缺いた點があると言ひ、其用語中に同一の意味を幾樣にか書き分けたりして曖昧な用語がある事を指摘して、用語の不用意なるを示し、規定の缺陷を擧げ制裁を明記せざる事刑の輕重につきての量定を誤れる事、人によりて寛嚴を異にする事を數へ、式條中に「右大將家の御時」と言ひ賴朝在世時代の先例に典據したと稱するものは必ずしも賴朝の時に始つたものではなく、單に古來より然るを意味

するものであつて、立法者の歴史的智識は缺乏して居つたことを示すと斷じた、「五人組制度論」（穗積陳重）は五人組制度は繼受法にして支那に於ける五保制度の由來するものであるとし、我法制上の沿革を說き、其組織をば五家一團を以て通則とする民戸團體であつて同時に地域團體であり、其組合員は婚姻、養子緣組以下の立會人たる外に賣買質入證書の連印、犯罪の連帶責任等ある事を言ひ五人組法規を警察法、宗敎法、吏員法、驛傳法、租稅法、勸農法、營業法以下に分ちて收め、姉妹制度として保甲制度支那の鄕約、英國の十人組と比較して其利害得失を論じ、隣保制度の復興が文化政治の一方策であると結んで居る「法印と俗位との關係」（山本信哉、史學雜誌）は林道春が法印たるの故を以て贈位の恩典に浴すべからずと言う說の理由なきを辨ぜんとして巨細の實例を引き、法印に冠する俗官位は一種の稱號であつて、法印の俗位相當は建武二年以後は攝家の子弟以外は四位少將に准じて居るから今日の位階を以てすれば正從四位に配すべきであらうと言つて居る。更に經濟の方面に移れば、「日本經濟史原論」（本庄榮治郎）は日本經濟史研究の必要・方法を說き、研究材料を總覽、資料、論著の三部に分ち更に細目に亘りて或は解題し或は內容一班を示して研究者の指針としたものである。「中世寺領に就いての管見」（魚澄惣五郎、歴史と地理）は寺領の發達は土地獨占と言ふ如き弊害の外に、耕作反別の增加を來し國狀世態の新たたる發展の基礎となれる事を見逃すべからずとし、當時の土地收穫が多數者の手に分配されし事は却つて貧富の隔を緩和し得たりと斷じて居る。「誤られたる日光廟」（平泉澄、史學雜誌）は普通世間に傳へられる日光廟の歴史及び權威ある學說にも誤謬多しとして日光大造營は寛永十一年九月家光社參の時に家光の頭に浮び十一月普請初があつた、其奉行は秋元但馬守泰朝一人で松平右衞門大夫は關係ない、其費用は全部幕府の支出にかゝるもので決して諸侯に課したものではなく諸侯の寄進したものは何一つもない。而して其造營の目的は諸侯の財力を疲弊せしめん爲のものではなく家光の至純なる景仰によるものであると言つて居るのは「德川家康の遺金」（同人、同誌）が、財政上に深き注意

を拂つた家康が細心を以て貯へた駿府の遺産は大約二百萬兩であると推定し其内約百萬兩は御三家に配分し貸與されたが殘百萬兩は寛永九年及十三年秀忠が死んで間もない時に江戸へ移された。家光は秀忠存生の間は之に一指も染めなかつた事は、日光造營が寛永十一年まで行はれなかつた事の傍證とならうと言つて、日光廟造營の費用の出所を暗に說明して居るのと參看して一種の興味を感ぜしめる。「德川時代特に其の中世以後に於ける外國金銀の輸入」(内田銀藏、日本經濟史の研究)は德川中期以前にも外國金銀の輸入あつた事を指摘し、寶曆十三年より寛政二年まで廿餘年間年々清商と約して一定の元糸銀若くは相當の金銀を輸入し、清商はまた花邊銀錢、西域金、安南金等を輸入し並に我國より海外に流出したる古金を再輸入し阿蘭陀人も亦此期間に銀錢を輸入したのであつて其數量は我文字金に換算して實に一萬四千四百二十六萱餘に上り、其代りに輸出された貨物は銅及び煎海鼠鮑昆布等の海産物であつたから銅の輸出を防止せんとして寛政二年に一旦外國金銀の輸入を中止せしめたけれども

其後も實際に於ては引續き其の輸入は絶えなかつた。而して當時の邦人は外國金銀の國内吸收を以て國益と考へた事と、其代物としての海産物製造には幕府も大に意を注いだ事とは江戸時代經濟方面の視察に特に注意すべき事であると結んで居る。

政治史方面に關しては「前九年役後三年役の稱呼に對する予の見解」(藤岡繼平、歴史地理)は前九年役は天喜三年より康平六年に至る九ヶ年間、後三年役は應保二年より寛治元年に至る三ヶ年間に亘る戰役であつて、前九年役後三年役の俗稱は何れも相當謂はれある事であると言つて嘗て此前九後三の稱呼に就て論究のあつたに對して一說を提出したのであるが之に報ゆるために「前九年後三年の稱呼に就いて、」(喜田貞吉、同誌)の反駁論が出で、所謂前九年役は永承六年から康平五年まで十二年間であつて、頼義と安信氏との對戰は古への所謂十二年合戰であつて斷じて前九年役ではない、義家と清原氏との戰役も亦永保三年より寛治元年まで足かけ五ヶ年であつて斷じて後三年役ではないとて前年の說を固持し、更に前九後

三といふ誤解は隨分古くから鎌倉時代から物に見えて居るが、前役が十二年合戰であつて之を奥州十二年合戰と言つて人口に膾炙して居つたので、歴史に暗き鎌倉時代の俗學者が後役をも之に含蓄さるゝものと誤解して、前役に九ヶ年、後役に殘りの三ヶ年を當てたのであると言つて前年の說を固持して居る。降つて幕末維新時代の研究は割合に賑かであつた、先つ「坂下事變に於ける斬姦趣意書の作者に就て」(森本樵作、歴史と地理)は大橋訥庵を以て其作者と看做されし當時の說を排し、嘗て河野守弘を以てそれに當てた著者の舊說を改め、椋木八郎卽ち其人であつて大橋訥庵は校閲者であると斷定して居るのと「梅田雲濱逮捕の月日に就きて」(妻木忠太、歴史地理)はさきに著者の著はされた幕末歴史便覽に安政五年九月七日としたに對して田村吉永氏が十月十四日にいまだ捕縛されて居ないとの說を提出したから之に對して「梅田雲濱逮捕の月日に就きて」(藤井甚太郎、同誌)また二史料によつて九月七日說を支持して、また「再び梅田雲濱逮捕の月日に就て」(妻木忠太、同誌)は九月十一日附福原與三兵衞の書狀によつて前說を毗補して居る。維新以後となつては「版籍奉還始末の研究」(澤田章、史林)は版籍奉還に至つた由來徑路を詳細に記述し、諸藩競ふが如くに上表を朝廷に出しはしたが、衷心不安と反對を抱いたのは長藩以下薩土肥其他であり、不平反對者は西鄕隆盛や官吏と氣脈を通じて政府の開國政策に反對しやうとしたので、車駕再幸の上公議輿論によりて國是を議定せんとするに當つても政府の基礎を固むる必要があり、それには薩長藩主及隆盛を起して廟議に預らしめやうと言ふので勅使を兩藩に派遣されたが豫期の成果を收むるに至らないのみならず、版籍奉還は議論紛々として歸着しないので、岩倉公の折衷說により知藩事の設置となつたのであると論じて居る。而して其總勘定をして最後の裁斷を下したものは「明治維新成敗の跡を顧みて」(三浦周行、解放)で、明治維新に於ける復古と御一新とのモットーに現はれた保守的氣分と急進的氣分とは社會の各方面に現はれて矛盾撞着となつた、維新の中核が國民の多數政治、上下の平等待遇であつたものが、二三の强藩の擡頭となり、官吏と軍人

この政治となつて軍閥、祕密外交は國民の指彈を受けたまた明治の社會が廢佛毀釋からして信仰界の攪亂となり實利主義唯物論者となり終つた事は維新宏謨の未だ徹底せない缺陷であつたと論じ、更に「明治文化史概說」（同人、同誌）はそれに續いて起つた歐米文化心醉の時代を叙し武士に代つた官吏の擡頭御用商人の横行から議會開設運動に涉り其の反動として國粹保存の稱道條約改正に關する對外硬論が起り日清戰爭によつて一層國家的觀念高潮し日露戰爭後は思想界の動搖甚だしく軍閥者流の軍備擴張熱や事業熱の爲めに租稅の負擔を增し物價騰貴し貿易は入超を續け國家の一大危期に臨んだが是は文化の墮落といふよりも一時岐路に低徊したものと見るべきであらうといつてゐる。尙ほ雜誌『解放』には明治維新及び明治文化に關する研究の特別號を發行し見るべき論文は少くなかつた。次に筆を轉じて歷史地理關係のものを求むれば、「東國考」（喜田貞吉、歷史地理）は、東國はもと夷地であつて漠然と東方の國の義を以てアヅマと呼んだのであるが、漸次王化に俗してもなほ特別の施政を要するもの

があつたのでアヅマといふ總領卽ち太宰の府の下に統括せられたのであるが、大化以後も幾年か其行政廳は存續したと言ひ、「鵯越と一の谷」（同人、同誌）は一の谷合戰の事實は平家到着後數ヶ日滯在せし一の谷城なるものは到底十分の工事を營む餘裕なく、天皇以下非戰鬪員は海上にあり、源氏方は義經は搦手一谷より範賴は生田の大手により壓迫を加へたのであつて所謂一谷合戰とは生田一谷兩地に行はれたもので一の谷城とは生田一谷間一帶であり、鵯越とは今の夢野に通ずる坂路である。大手の軍二千搦手軍一千、鵯越に向つたのは僅かに七十騎であつたと言つて所謂一の谷合戰が如何に誇張され其他地理上の推定の誤謬多きかを指摘して居る。「中世都市の發達」（三浦周行、經濟論叢）は我國中世に於いて都市の發達を來した事は政治的都市の增加した事の外に、商業の進步、社寺の保護に依る事が大であると言つて鎌倉、兵庫、堺、小濱等を例證し、特に兵庫及び堺が對外關係上異數の發達を遂げ、兵庫は東大寺領として其保護の下に置かれ、堺は南朝のために盛んに利用せられ、室町時代以來既に自治制

度が行はれ天下の財權を握つた由來を詳說し、「五泊考」（喜田貞吉、歷史地理）は室生泊、韓泊、魚住泊、大輪田泊、河尻の所謂五泊は天平年間行基の設定する所であると言ふ古來からの說を排して、河尻を五泊の起點とする事は三國川が淀川の本流となつて始めて內海航行の要津となるもので、少くとも延曆四年以後でなければならぬから決して行基の所爲ではなく、平安朝初期の事であらうと論じた人物論亦可なり賑かであつたが、これを年代順に配列するならば「神功皇后について」（和辻哲郎、中央史壇）は、古事記に記されたる皇后と日本書紀に載せられたる皇后とに相違のあるは紀の編者が女英雄中心の傳說を潤色したのであるが、全然歷史事實と關係ないかと言ふことさうは思はれない、此傳說の核となつた歷史的事實は確かに存在したらう、而して此核を見出す事は結果の乏しい閑事業に過ぎぬと言つて古代史研究の態度を示したに次で「習宜阿曾麿」（喜田貞吉、同誌）が奏上した僧道鏡を天位に卽けしめよと言ふ神敎は、道鏡の凶惡を見かねて百川、永手等一派の畫策であつて阿曾麿は淸麿、法均と共にそれを實演する舞臺上の役者であつたが、計策甘く行はれず馬脚を露はしかけたので早く淸麿等に全責任を負はせたのであるとしたのは「道鏡皇胤論」（同人、史林）が、道鏡は物部弓削守屋の末裔である弓削氏の女が施基皇子に聘せられて產んだ子であつて母姓を冒したものであつて河內の一臣民ではあつたが皇胤であつた。これが百川等をして乘ぜしめた點であつて、皇位覬覦の野心を起さしめんがために阿曾麿をして神敎を傳へしめ、其上にて彼を陷れんとする狂言であつた。かく考へてこそ道鏡が唯一の擁護者稱德天皇の崩御後にも自衞の策を講じもせず僥倖を夢みて天皇の陵下に念佛三昧に耽つて居つ事が理解出來ると言つて居るのは「片桐且元」（三浦周行、同誌）は豐臣秀吉のために七本槍以來の重臣であつた彼が、關ヶ原の役後に於ては家康の意を承けて大阪に籠城し種々家康方のために畫策し、財政の鍵を握つて居つた地位を利用して社寺の造營に莫大の出費を餘儀なくせしめ、好き機時を見て退城した或る意味の高等探偵であると斷じたものと共にそれ〴〵の人物の暗黑面を明るみへ出したもの

である「田沼意次」(辻善之助、同誌)は彼の執政時代に現はれた士氣の廢頽、紀綱の弛緩、風俗の淫靡、貨幣の改鑄の如き非難を受けて居るものは、概ね前代にも現はれたものであつて、定信の改革は一面に於て田沼時代を變しがらせたものであり、殊に彼の開國主義の如きは他に類例を見ざる大度胸のもので、政治家としての手腕度量はまた認めなければならぬが、たゞ德望に缺くるところがあつたと言つて居る。「史學者としての松下見林」(古田良一、藝文)は、國史研究の史料として外國書籍の必要に注目したのは彼の識見の勝れた點であるけれども、日本書紀の性質を深く研究せず其紀年を過信したのは研究法の缺點であるとし、「天文方保井春海の研究」(飯田忠純、歷史と地理)は春海が幕府の天文方となりしは彼の學力の外保科正之の助成によつたことを指摘し、宣明曆の代りに貞享曆の採用さるゝまでの彼の努力を叙し、彼の新曆は池田昌意の意見による事多きも其實際的研究に甚大の勞苦を嘗め實際問題に活用した功蹟の偉大であつたに拘らず、彼の子孫が何れも其家名を全うし得なかつたことを慨いて居る。〔中村〕

思想信仰に關する方面に就いては先一般的の者として「古神道に於ける道德意識とその發達」(村岡典嗣、哲學研究)は太古では自然の生成力の發現を善とした爲め其道德意識は感覺的功利的であつたものが、國家組織の整頓、氏族制度の確立、三韓との交通から漸時道德感情の純化が行はれ神觀の上にも氏族神の性質を强め祖先崇拜が發達し又神性の內容に合理性を要求したといひ、「祭政一致と祭政分離」(喜田貞吉、民族と歷史)は太古の祭政一致は政治の多岐に涉る樣になつてから漸く分離し國造家が政權に離れ、尋で滅亡し、祈禱等の事は賤民の業となつたといひ「平安朝末期の信仰に就て」(竹岡勝也、歷史と地理)は平安朝末の貴族は神事佛事を華美にし、遊戲視したといふ考に對して、彼等は榮華に誇りながら當時の天變地異や武士僧侶の暴力に不安を感じ、淨土を欣求してゐたので、神佛事を華美にしたのも、それが神佛の意に背かないのみならず却て其の意を迎へる事が出來ると考へたのに外ならぬといひ「末法思想の信仰と其の影響」(富

森大梁、同誌）は鎌倉時代の新佛敎の勃興は舊佛敎の墮落修業の困難等の外部的の原因によるばかりでなく人心の機微に觸れた信仰上の問題卽ち末法思想があつたからで正像末、釋尊入涅槃の時に就ては皇紀前二百八十九年入滅正像二千年說が一般に信ぜられてゐたといひ、末法逼迫の時に際して偶々天變戰亂が勃發した爲め世人の恐怖を大にし、餘經悉滅機根下劣の時に適した淨土宗日蓮宗の念佛誦題の佛敎が起つたとし、「武家と神社」（宮地直一同誌）は武家が盛になると共に社寺の保護者ともなれば管理者ともなり、神社は進んで其の干涉を受けんとし、又其の祈禱所ともなつたこと、其の他守護の管內神社の拜禮や、武家と神主と同一人で兼ねたことなど次第に神社に及す武家の勢力を見ることが出來るといつて居り、「明治思想史」（淸原貞雄）は明治年間の思想の變遷を略叙してゐる。神祇に關するものでは「少彦名命の研究」（喜田貞吉、民族と歷史）は小人の義なる少彦名はコロボックル傳說の現れであつて此の神をクシの神といふのは蝦夷の神の義で此の神を知れる久延毘古といふ神のクエも樺太アイヌをクエといふそれで畢竟アイヌの神に外ならぬといひ、「出雲大社祭神考」（同人、同誌）は杵築大社は大國主神を祀つたことは明だが平安朝以來素盞嗚尊又はそれと大國主神とを併祀したものだとも傳へられた國造はもと意宇郡領として國廳に住み、其の附近なる素盞嗚尊を祀つた熊野神社を崇敬したが郡領の職を離れて專ら杵築大社に仕へる樣になつてから尊をこれに併祀したのだらうと說き「諸神同時昇叙の研究」（宮地直一、史學雜誌）は嘉祥三年から元龜三年に至る十五箇度の諸神同時昇叙の原因に就き卽位內亂外寇、辛酉甲子革命等一々其の事情を詳述してゐる「三條坊門八幡宮の由來」（同人、歷史地理）は此の社はもと久我通成の邸內の鎭守であつたが、邸址が足利直義義詮の邸、幕府の所在地となつて、又其の鎭守となり、後獨立の社となつて貞治六年に三寶院門跡を別當に補し、滿濟准后の時代になつて大いに榮えたといひ「六條左女牛八幡宮に就いて」（魚澄惣五郎、歷史と地理）は此の社はもと六條にあつたので社傳では後冷泉院勅願勸請となつてゐるが史料の上では源賴朝以前に遡ることと

は出來ぬ併し社地はもと爲義の邸址だから邸内の鎭守だつたのだらう賴朝は此の社の尊崇篤く殊に足利氏に至つて榮え別當職が三寶院門跡の手に歸してから一層榮えた秀吉の時東山大佛の邊に移され後今の五條坂の地に移つたといひ神道說に關するものでは「本居宣長の神道說とその思想的根據」(竹岡勝也、系譜と傳記)は宣長は神の存在に關して人間理智の權能を否定し敬虔な態度で信仰した爲め儒敎の說明的態度を攻擊し人心の情意の自由な發展を尙んだので宣長の生れたのは人情を歌つた近松門左衞門の死後六年の事で、當時世上に人情を重く見る思想があつたのが宣長の思想の根據となつてゐるといひ「垂加神道派の日本魂と復古學派の大和心」(栢原昌三、中央史壇)は宣長の學問は垂加度會の神道に淵源してゐる所もあつて、その敷島の歌は谷川士淸の日本魂の歌の形式に倣つてゐる垂加流の日本魂といふのは君國の萬古不易を希ふ情だが宣長の大和心は日本國民性の全般に解してゐるといつてゐる。儒學に關したものでは「伊藤仁齋の敎育効果論」(高橋俊乘、哲學研究)と「夷人物茂卿の辯」(同

人、歷史と地理)とが注目に値する。前者は仁齋は孟子を承けて性善を說くが惡の氣質をも認めたが本質を善に歸するのである、孟子の四端については萌芽と解しこれを擴充する事によつて德性を成就するものとして敎育の可能性をこゝに見出してゐる、宋儒は萬人同一量の性を有すとするが彼はこれに差別を設け限ある性を無究に盡さんとする爲めに敎育の必要を說き、かく個性の差異を認めてゐるから劃一主義を排したといひ後者は徂徠が孔子像の贊に夷人物茂卿と書いたのに就て後世の非難を招いたが彼の考では東夷とは東方の外國人位の意味で、孔子を主位に置く爲めに自分をその外國人と見たので、彼自身では論語徵に日本といふ語には必ず闕字をしてゐる位だから其の愛國の情を見ることが出來るといつてゐる。心學には「心學と石門派」(堤達也、國學院雜誌)は石門派の心學が陽明學から出たといふのは誤りで心學の語は夙く韓退之に見え、心を修むる學の意で必ずしも陽明に始らず石門派の人々は朱子の說を奉じて却て陽明學の書を讀んでゐないと說いてゐる。

佛教界は昨年頗る多事であつて聖德太子の千三百年御忌といひ傳教大師の千百年忌及び日蓮上人の誕生七百年記念といひ日本に於ける法華經弘通の記念すべき年であつた從つて是に關する幾多の著書論文が公にせられたが中にも特に注意すべきものとしては先づ太子大師及び上人を比較した「日本佛教の三大人格」(姉崎正治、法華)「聖德太子と日蓮上人」(同人、同誌)は太子の法華經に對する考は時の關係なくたゞ一乘開會の主旨ばかりだが大師のは天台の影響を受け末法逼迫の考が強く上人のは末法の初期にあるこの考が非常に強い又太子は大乘歸一を說いたばかりで民衆感化の事業が足りないが大師はそれを補つてゐるといひ又太子と大師とを比較した「聖德太子と傳教大師」(三浦周行、太陽)は太子と大師とは身分時世を等しくしないが兩者に共通の點多く太子は日本佛教の輸入者で近世の佛教は多く叡山から生れてゐるから大師は又日本佛教の開祖ともいへる太子は法華經研鑽の第一人者で大師の天台宗はその精神を承けたものだ佛教流布の態度王道主義の鼓吹救濟事業高潔なる人格等共通な所が多いと說き太子の思想史上の位置については「國民道德史上より觀たる聖德太子」(河野省三、聖德太子論纂)は後世の太子に對する非難は崇峻天皇弑逆事件と佛教過信との二つにあるが太子は國家觀念頗る強く損身固國はその精神で弑逆事件には馬子を罪し得なかつた事情があつたので太子の崇佛は極端であつたが神道史上に於ける事蹟も亦豐富であるといひ「聖德太子の日本佛教史上に於ける地位」(境野黃洋、禪宗)には太子は日本の釋迦佛であるとの信仰は古く誕生の傳說にも現はれてゐる、太子を釋尊に比するのは單に日本佛教の祖といふばかりではなく日本的佛教卽ち大乘教弘布の上に就いての事である、太子の大乘教に關する思想は三經の義疏中に見えてゐるが、三經中で中心となるものは維摩經義疏であるといひ、太子の信仰については「聖德太子の佛教」(妻木妻良、聖德太子論纂)には太子の信仰は涅槃宗や三論宗の教義に一致してゐるが、其の表現せられたのは三經の義疏でこれは婦人在家及僧俗に通じて佛教の精神を敎ふる爲めに選ばれたものである各宗共太子の尊崇しないものはない中

に特に親鸞が和國の教主として讃仰したのは太子が維摩經義疏に大經の第十八願の文を引用せられてゐる樣に淨土教の信仰があり日本に於ける佛教の開祖であり、又太子の立られた凡夫主義が眞宗の教義に一致するからであるといひ、又「聖德太子の信仰と天壽國曼荼羅」（辻善之助、同書）は此の曼荼羅は太子及當時の信仰を知るに足る好資料であるが其の意味を明にすることは出來ない或は西方極樂淨土だといふ說もあるが天壽國といふのは法王帝說に猶云天耳といひ圓中兎と桂の繪があつて月を表示してゐる事明であるから天上の表象で恐らく兜率天を意味するものであらうといひ「聖德太子と御音信仰」（黑板勝美、禪宗）は太子の信仰の本尊は觀音で親作と傳へられてゐる夢殿の太子等身の救世觀音があり、又太子像の胎內に金銅の觀音像や聖觀音の眞言が書かれたのがある太子は觀音信仰の弘通を希ひ觀音經疏を著されたといふ事から、飛鳥時代、奈良朝平安朝の觀音信仰と三十三所の札所の事に及んでゐる。三經義疏については「上宮御製疏について」（橋川正、聖德太子論纂）は三經疏の親作の事は夙く法隆寺資財帳に上宮聖德法王御製者といひ、又智光の淨名玄論略述に引用せられ、御物に法華義疏の御草本があるから疑はれない義疏の說は主として法雲に據られたのであるがそれに盲從せられずに自己の意見で批判せられた後世義疏の研究者に凝然があり、又義疏の影響は日本のみならず朝鮮支那に及び支那では明空が法華勝鬘經疏の私鈔を著してゐるといひ「聖德太子の三部經疏に見えたる思想及其影響」（中澤見明、史學雜誌）は三經義疏の內法華經は國民信仰の標的として、勝鬘經は天皇の御理想として講贊せられたが維摩經は太子御自身の理想とせられたもので特に講贊の事は無かつたらう太子は維摩居士に倣つて救世の大菩薩を以て自任し獻身的國家救濟の事業に從はれたもので後に聖武天皇が三寶乃奴と宣ひ歷代の天皇が身を以て國家の難に代らんとせられたるのも皆太子の犧牲的精神の影響であるといひ「勝鬘經義疏を讀みて」（金子大榮、佛教研究）は太子が推古天皇の爲に勝鬘經を講ぜられたのは女帝なるが爲で經中佛の勝鬘夫人に與へた授記に當來天人中の自在王とあるのを帝に擬し

夫人の十大受三大願によつて日本國に正法を流通せらるゝ事を信じられたのであるといひ更に各宗から見た太子に就いては「佛教各宗より見たる太子の信仰」(大屋德城)ある外に、論文としては「聖德太子と天台宗」(菊岡義衷、聖德太子論纂)は太子は純大乘の根本たる法華經を立脚地として國民の信仰を樹立する思召であつたが奈良朝の佛教は其の主意に反するもの多く、平安朝の初めに太子の精神を繼承しようとせられたのが傳教大師であるといひ「聖德太子の人格と眞宗」(大須賀秀道、同書)は親鸞及眞宗門徒によつて尊崇せらるゝ太子の人格は日本文化史上偉大な功績を殘された歴史的人格ではなく自己の生活を指導する宗教的人格である親鸞と太子との關係はその神秘な傳說によつて着色せられて居り又親鸞の瞰肉斎妻の生活は太子の一生に彷彿してゐる併し親鸞は太子を眞似たのではない彼に映ずる太子の人格は救世菩薩の應化で大慈大悲の表現であつたといひ「日蓮聖人より觀たる聖德太子」(田邊善知、法華)では日蓮は太子が佛教興隆法華經弘通の事業を奉贊してゐるが涅槃宗の光宅の義を受けられたものとして正師正系に數へてゐないといつてゐる又太子に關する諸種の傳說に對する批判としては「聖德太子の奇蹟」(喜田貞吉、聖德太子論纂)は太子は偉なる聖者として年と共に其の行狀中に奇蹟談が附加せられたので早い頃の書紀や菩薩傳には豫言めいた事件はなく、補闕記から傳曆と下るに從つて益々多く中にも科長御墓造營の傳說の如きは考古學上の調査がそれを裏切つてゐる慧思禪師應化說は年代の錯誤はあるけれども古くから信ぜられたもので恐らくは太子御自身も信ぜられたらうといひ「聖德太子未來記の研究」(和田英松、史學雜誌)は堀河天皇以前に出來たと思はれる本願緣起及び榮花物語以下に見える七類約二十種の讖文について解說し多くの未來記は耶馬臺詩の影響を受けたものだらうが太子が豫言せられたといふ信仰は早く東征傳に見え書紀に兼知未然とある所から基いてゐるのだらうと說いてゐる。太子の傳說で昨年中に出版せられたものゝ中で注目すべきは「太子所行讃」(赤木桁平)「聖德太子と其の事業」(高瀨承嚴)等で又太子傳を對照として研究したものには「聖德太子

傳曆正本の研究」(藤原猶雪、佛教研究)と「上宮太子御記の研究」(橋川正)とがあり、前者は東京帝國大學圖書館所藏太子傳傍注に菅原爲長が書入れた太子傳曆を正本に擬し、流布の本と對照し、曆錄本願緣起等の引用を後世の竄入だとし官家本の識語によつて延喜十七年藤原顯輔の撰としてゐる後者は西本願寺に藏せらるゝ上宮太子御記が嘗ては親鸞の著であるとせられたが著者は東寺觀智院の三寶繪詞と對照して御記が其の中卷聖德太子の一節の別行せられたものであることを論證した。轉じて傳教大師に關するものを見ると「傳教大師と其時代」(辻善之助、中央史壇)には奈良文化の墮落と佛教の腐敗との爲めに平安遷都が行はれたので、桓武天皇は特に舊佛教を壓抑せられそれに代る新しいものを要求せられてゐるが此の時に際し傳教大師が出たので、大師を天皇に薦めたのは恐らくは和氣清麿だらうといひ「南都教家に對する傳教大師の感想」(大野法雲、無礙光)では大師は南都佛教家の研究の抽象的態度や小乘四分律に滿足せられなかつたといひ「佛教史上に於ける日本天台戒律の意義」(宮城信雅、哲學研究)は大師が南都佛教の腐敗を慨し又法相宗から弟子を奪はれる爲め教團獨立上の必要から六條式八條式等を定め尋いで大乘戒壇の建立を要求せられたのであるが而も其の第一義は教義上から大乘を奉ずる爲には圓頓菩薩戒が必要であつたのだとなし「傳教大師と弘法大師」(村上專精、中央史壇)では兩大師を比較して十箇の重大差異を擧げてゐるが傳教大師は比叡山に籠られてゐたのに弘法大師は多く京都市中の東寺に住み前者は教育傳道を重く見たが後者は祈禱を主とし戒律では一が大乘戒を必要としたのに他は猶小乘四分律に據り又天台宗は佛教の革新で後の新宗派の淵源をなしてゐるのに眞言宗には其の意味が無いといつてゐる而して延曆寺に於いて大師の遠忌を記念せんが爲めに出版した「傳教大師傳」(三浦周行)は幾多の大師傳中特に注目すべきものである。日蓮上人については『大崎學報』が記念號を出版して幾多の論文を收めてゐる外多くの研究もあつたが吾人の眼底に殘つてゐるものは比較的少數である。中に就いて「日蓮聖人の人格」(新間智啓、法華)は日蓮が智的情的兩方面の人格も偉大

であつたが、意志の方面は一層偉大であつたことを述べ「日蓮の元寇豫言について」(辻善之助、歴史地理、法華)は立正安國論は元寇の豫言ではないといふものがあるが、日蓮は皇位の兩統對立や北條時輔の亂をも豫言してゐるから未然を洞察する勝れた感受性があつたといひ、「日蓮聖人の國難豫言」(新村出、藝文)はこれに就いて日蓮の豫言は經典の上から演繹したもので、蒙古の牒狀が來るまでは具體的の豫言がなかつたといひ、「日蓮聖人遺文に現れたる念佛無間の說に就て」(大原性實、六條學報)は日蓮の四箇格言の最初に現れるものは文永五年道隆に與へた書狀で無間天魔等の四能破は念佛以下の四宗に通じるのであるが、念佛が極樂往生を談ずる所から是に反する無間の語を配したものであつて、其の無間の意義に念佛は權敎方便の說なればといふ法體無間說と念佛者は正法を誹謗するが故にといふ一念佛者無間說との二あることを說き次で日蓮の誦題念佛優劣論を紹介してゐる。一般の佛敎に就いては先づ敎理史方面では「德一の敎學に就て」(島地大等、哲學雜誌)に注意しなければならぬ德一は平安朝初季敎界の混沌期に際し法相の壘に據つて奮鬪した猛將で天台の衆生の機類を平等視するに對して三乘眞實を固執し佛性の根本的絕對的差別を說き眞言に對して十一箇の疑問を設けて肉迫した。傳敎大師は極めて善く彼の議論に應酬したが弘法大師の是に顧慮しなかつたのは兩者の性格の然らしむる所であらうと述べ「聖問中心の敎判論」(新免隆眞、摩訶衍)には法然の判釋は安樂集に從つて聖道易行の二道に判けたが、聖問は聲門菩薩の二藏に判ち、菩薩藏は卽ち大乘でこれを亦頓漸の二敎に分ち頓敎を更に性相の二頓となし、漸敎及び性頓は聖門道で相頓が易行道卽ち淨土宗に相當するのである聖問の敎判の所依は菩提流支の麒麟聖財論であるが、聖財論は僞撰であるけれども隨他扶宗の趣意から僞撰と知りつゝ依用したのであるといひ、「親鸞聖人の神祇觀」(杉紫朗、六條學報)は當時世上の批難に對して神祇冥道を輕蔑する事はないと辯明して居る彼は神祇は念佛者を守護するけれども信仰の人は祭祀すべきでないといつてゐるといひ僧傳の方面では「明惠上人」(辻善之助、歴史と地理)には鎌倉

時代の思潮は實際的復古的で此の時に上人及び解脫上人等の出たのは時代思潮に催されたものである上人は純潔無垢で深く父母及び敎父釋尊を慕ひ屢印度に渡らうとして果さず華嚴宗の復興を志し遂に栂尾に高山寺を興し四民の信仰すること慈父の如くであつた上人は大自然に歸る要を說き阿留邊幾夜宇和の七字を持つべしと敎へ又權勢に恐れず北條泰時に承久亂の措置について詰問したといひ「俊乘房重源入滅年代考」（高瀨承嚴、佛敎學雜誌）は重源示寂の年月は建永元年六月とする事には異說はないが其の日については諸說がある中に三長記によつて六日とするのが正しいといつてゐる。「親鸞人の在叡時代」（鷲尾敎導、六條學報）は親鸞は九歲の時得度し同年登山受戒した戒師の名は不明だが無動寺大乘院で慈圓に從ひ舍那止觀兩業を修し、舍那業は慈圓の門下だから三昧院流であらう十二年不出山門の決心であつたが早くから出離の願があつたので灌頂を受けるに至らなかつたらうといひ「向阿證賢の事蹟及び其の思想」（高瀨承嚴、佛敎學雜誌）は其の家系及び文永六年の出生より出家、淨華院の創立示寂を叙して門下に及び其の思想としては哲學的研究よりも寧ろ信仰方面を主としたことを述べて著書に涉つてゐる、此の他單行になつたものでは「弘法大師傳の研究」（牧野信之助）及び寛文六年不受不施の宗義を固守して幕府の法に觸れ佐土原に流謫せられた日講の一生を叙した「殉敎史譚日講上人」（若山甲藏）が注意すべきものである。寺誌敎會史の側のものでは「仁和寺になるまで」（赤攝文次郎、歷史地理）は仁和寺はもと光孝天皇追福の爲めに小松山陵内に立てられたもので天台宗の幽仙が最初の別當となり昌泰中眞言宗の觀賢が別當となつたが宇多上皇の御止住より此の寺は盛になつた、大覺寺は嵯峨天皇の別業嵯峨院のあつた所で皇女正子内親王卽ち淳和皇后が捨てゝ寺とせられ廢太子恒寂親王がこれを繼承し宇多上皇の有に歸した爲めに仁和寺の院家となつたといひ、「淨華院の開創に就て」（伊藤祐光、摩訶衍）は同院所藏の專空讓狀知恩院所藏の小經紙背文書によつて同院はもと專空が三條坊門高倉に興した專修院を同門の向阿に讓つたもので向阿はこれを淨華院と改め後康永三年の火災によつて

雙岡西光庵に隱遁してそこで寂を示したが、寺は二代玄心によつて土御門室町卽ち元淨華院町に再興せられたので火災後六年觀應二年には旣に建立出來てゐたといひ、「淨華院香衣參內綸旨宣下顚末に就て」(高瀨承嚴、無礙光)は淨土宗で香衣綸旨を受けたものは同院の等照上人が最初であるが上人は萬里小路家の出で稱光院天皇の御惱を祈て驗あり天皇の御知識となり萬里小路時房から香衣着用を願つて勅許があつたが武家の承認が無かつたので滿濟准后に依賴して其の許可を得たといつてゐる「親鸞敎團の組織」(橋川正、歷史と地理)は鎌倉時代の武士階級は團結を生命としてゐるが此の時代の新佛敎が同信者の團結生活を計つたのも其趨勢に應じたもので法然の宗敎は未だ舊佛敎の殼を脫しなかつたが親鸞のは坂東に於いて創唱せられた地理的關係もあつて大いに信徒の團結のあつたことを述べ其の敎團の組織が聖フランシスのそれに似てゐるといつて彼此を比較してゐる「親鸞門侶の地理的分布を槪觀し其鄕土史料より聖人の影像幷に墓標の原型を想ふ」(藤原猶雪、圖書館雜誌)は門侶交名牒中に見える門侶の分布を考へて關東奧羽地方に多いことを述べ此の地方から得る眞宗史料の中光明本や連座御影にある親鸞影像には古色を存し相一致してゐる點があるから聖人影像の原型を偲ぶべく、又古き繪傳によつて其墓標の古型を想像することが出來るといひ「越後に於ける親鸞門侶」(鷲尾敎導、歷史地理)は親鸞が越後流謫は五箇年間の事で定めて此の地方には門侶も多かつたらうが交名牒には覺善一人を擧げてゐるばかりで存覺の袖日記によれば柿崎に敎淨房一族五箇浦內塩見岩屋に妙蓮の居つたことが見えてゐるといひ「安藝門徒の一揆運動」(長沼賢海歷史と地理)には安藝門徒は大阪本願寺が出來てから顯如までの頃に佛護寺を中心として團結したもので元就の懷柔によつて嚴島戰に參加して東林坊が大いに活動した事から毛利氏が織田氏に抗して本願寺を助けたのも領內の一揆に對する策略で毛利氏を起せるまでに一揆は非常に活動したことを詳叙してゐる。其の他に又「選擇集の成立に就いて」(大須賀秀道、佛敎研究)は選擇集の要文輯錄の風は天台の傳統的形式であるが傳敎大師のは論戰の城壁

であつたのに對してこれは修道の資料で念佛教團の法味讃仰の標的となつたものであるといひ、淨土宗略要文と比較して要文を未整理の選擇集とし其の撰述の年を建仁四年としてゐる、選擇集については原本と覺しき盧山寺本によつて三人以上の執筆者の手になつたものとし、又往生院本の奥書によつて其撰述の年を元久元年とすべきものであらうといつてゐる「明義進行集とその著者」（橋川正、佛教研究）は本書は法然門下八人の教義信仰を述べたもので第二第三の兩卷が存するのみだけれども第一卷は恐らくは法然の教義を述べたものなるべく著者は信瑞だといつてゐる。

飜つて文學音樂演劇方面の研究を顧るに頗る寂寥を感ぜざるを得ない文學方面では古典の趣味の盛になる傾向のあることは稍注目するに足るものがある。「上代國文學の研究」（武田祐吉）は其の代表的のものである。雜誌『心の花』では萬葉集に關する特別號を出したが訓詁方面のものが多く史的研究は甚だ淋しかつた京都の方では源氏物語の研究が稍盛であつた。卽ち「鎌倉時代の源氏物語」（吉澤義則、歴史と地理）は源氏物語はその渴仰の念と文義が不明になつた事から研究が始められ藤原俊成の時から盛になつた其の以前にも世尊寺伊行の注があつたが傳はらず俊成は定本を作つたのみで注釋を書かなかつたが其の子定家は奥入を書いて置いた殊に源光行其の子親行素寂兄弟が最も熱心で光行の水原抄光行親行父子の校訂した河内本、素寂の紫明抄等があり親行の孫に行阿があつて原中最祕抄が其の作だといはれ、室町時代に定家の定本が勢力を得るまでは多く河内本が行されてゐたといひ「水原抄紫明抄の撰者」（山脇毅、藝文）は紫明抄は親行の著ではなく其の弟素寂孝行の撰で親行は水原抄を增補したものであらうといひ、其の他「河内本源氏物語と其の校訂者」「源光行親行年譜」（同人、同誌）等の研究がある「伊勢物語に就て」（長尾素枝、國學院雜誌）は此の物語の和歌の萬葉集から出たもの多く、其の各段の冒頭なる昔男ありけりといふ語も萬葉集卷十六の有由緣歌の注に昔者有娘子といひ又昔者有壯士などあるのと關係があることを述べ當時伊勢集等の如く此の物語に類した歌集のあつたこ

こから推して業平集から此の物語が出來た道程が判るといつてゐる「俊賴無名抄の著者と其の著述年代」(岡田希雄藝文)は無名抄が俊賴の著書として疑はれてゐるのに對して肯定說を述べ恐らくは永久三年正月頃の撰述であらうと斷定してゐる「紀海音の世話物について」(加藤順三、同誌)は海音の世話物は心中涙の玉井と小三金五郎浮名額とを嚆矢とするが玉井の方は近松門左衞門の影響を多分に受けてゐるけれども浮名額の方はその色彩はないが祭文の影響を受けてゐるらしいといつてゐる。音樂演劇方面では「歌謠史上に於ける雜藝に就きて」(志田義秀、史林)は雜藝といふ語の意義を論じて散樂と共演せられた曲藝或は茶番式猿樂又神樂催馬樂朗詠、狹義の今樣を含み時には又郢曲に擬せらるゝ廣義の今樣に屬する種々の俗謠をも含むことを例證し「郢曲及ひ今樣について」(同人、同誌)は郢曲といふ語を日本風に用ゐたのは明月記玉葉以降の事で梁塵祕抄に收められてゐる諸種の俗謠を總稱するもので、朗詠の一名だとの說もあるが記錄の上では謠物といふ程の意味に用ゐられてゐるに過ぎない。綾小路家では催馬樂今樣朗詠三者の總稱としてゐる又今樣といふのはもと流行歌といふ事だけれども後冷泉院後朱雀院の頃から一種の技術歌となり梁塵祕抄によると足柄歌等十三種の歌曲を總稱するが如く同書に常の今樣といへるものが狹義の今樣であるといつてゐる「花傳書の端書及び神儀篇は果して僞書か」(佐成謙太郎、藝文)は觀世世阿彌の花傳書の內、端書及び神儀篇は吉田博士によつて僞書と決定せられたけれども其の理由のないことを證し、「伊藤出羽椽と岡本文彌」(頴原退藏、同誌)は出羽椽は淨瑠璃座の名代で大夫でなかつたといふ說に對して署名のある正本を擧げてこれを肯定し其の座に有名な文彌の居つたことを述べ出羽椽が道頓堀に芝居を始めたのは元和中の事だから萬治寬文の頃に盛になつた出羽椽は二代目なるべく岡本今文彌といふのが三代目の出羽椽であるといひ、「民衆藝術としての江戶時代の演劇」(龍居松之助、早稻田文學)は女歌舞伎、若衆歌舞伎は本來民衆的のものであるが、それが更に民衆の趣味を本位として發達し儉約令の時にも歌舞伎が第一の犧牲になつた、似顏繪と聲色とは

歌舞伎の民衆的傾向を示してゐるといつてゐる〔岩橋〕

美術工藝の方面に眼を轉ずると推古前後の藝術が論議された事に注意を惹かれる。先づ「飛鳥時代の彫刻」(關野貞、聖德太子論纂)を見るには先づ大陸地方との關係を觀察せねばならぬが南北朝時代には兩晉以來固有の樣式が其中堅となつて居り其一部に中印度笈多式の影響を見るのみであつて、我飛鳥朝彫刻の中心である鳥佛師派は此南北朝固有の樣式を祖述して居る、從つて殆ど健陀羅式の形跡は認められない。大化改新後唐式輸入せられ笈多式の影響は大であつたが、平安朝に入つて密教藝術の將來と共に中印度パーラ朝式の感化頗る大となつたと言ひ、當代彫刻の性質及遺物を詳細に說明し、支那朝鮮が石造の遺物の外有せざるに反して如此多數の木像品を保存する事は世界の一大奇蹟であつて、其理由は我國體が萬世一系であつた事にも依らうが、遺物が悉く太子關係のものである事を考ふれば、實に太子の御盛德に依るものと言はねばならぬと言ひ其の「法隆寺金堂の藥師三尊像に就いて」(濱田耕作、同書)研究を加へ其製作を考察し金堂の建築と不

釣合に小さな像が、非常に高い臺座の上に置かれて漸く均衡を保つて居るのは、要するに當時の作者は小金銅佛をモデルとして之を擴大する以上の技術がなかつたゝめであつて、此像以上の大きなものは彼等の技能で出來なかつたであらうから臺座によつて金堂との釣合を補足したものであらうと言つたのと「聖德太子と美術」(瀧精一、同書)を說明せんために其時代の遺品を一々擧げて最後に此時代の美術は優美圓滿と言ふよりも寧ろ素樸勁直である、其繪畫の如きも極めて飄逸でしかも自由な空想的の趣が現はれて居る、決して充分に發達したものとは言へないけれども、其心持は壯であつたと論じたのと共に、推古藝術を過重視せず正當に評價したものであるが「太子と建築」(伊東忠太、同書)との關係を述べ、法隆寺の伽藍の完備は全く太子自ら經營された爲めであらうとし、更に此建築は支那、朝鮮、印度、西方亞細亞各地方の藝術を融合結晶せしめた點に價値があると言つたのは、關野博士の彫刻の場合に於ける外國影響の程度と些か所見を異にして居るのは注意に値ひする。「密教畫の手法に就

て」(藤懸靜也、國華)は、密教畫は何れも修法の本尊として描いたもので、修法の力によりて天然に打勝つだけの崇高と絶大の力とを有しなければならぬ菩薩部よりも忿怒部が最も顯驗のものとして取扱はれたが、何れも特定の形と色とを有して居るので其構圖は阿闍梨の指圖により、繪師はたゞ手法上に熟練せる技術を示すのみであるから其構圖は形式化され手法の妙はたゞ繪具の塗り方如何に存する事となり、僅に力强き描線よりてそれを表現する事となると言つたのは「醍醐寺五重塔壁畫に就て」(同人、同誌)說明し、密教繪畫の中忿怒尊に至りては赤不動以下勁健なる描線の力を籍りて雄偉なる形相を表はせる大作の例存するが、佛菩薩部の優麗穩雅なものに至つては極めて少く、この塔の中心柱の諸尊が纖細流暢なる線により姿勢端正なる妙相を最もよく描寫せるは我美術史上に頗る重要なる位置を占むるものであるとして居ると共に密教畫の兩方面を說明したものである。「日本の肖像畫と鎌倉時代」(內藤虎次郎、歷史と地理)は日本の肖像畫は鎌倉時代に入りて日本風のものとなつたと、藤原隆信信實一家の似せ繪卽ち是にして簡單なる用筆の間に精采あり肖像畫の最盛期なりと斷じ、肖像畫の發達が禪宗の影響によるものなりとする說、及ひ足利時代を以て肖像畫の黃金時代とする說の根據なきを論じ「藤原隆信と其一族」(粟野秀穗、同誌)は醍醐の信海阿闍梨、親鸞上人白描畫像の筆者專阿共に信實の子なるを記し、其一族に歌人多きを指摘したる事や「御物蒙古襲來繪詞に就きて」(藤懸靜也國華)說明を加へて其前後二卷に分れて文永弘安役に於ける長崎季長の戰功を描いたもので、其畫家は少くとも二人あつたと言ふ說に贊成し、此繪卷物が出來た目的は季長が其子孫のために自己の戰功を書き遺したものでそれは京都に於て彼より戰況を聞きて構圖したものであるから作家は誇强的態度を以て勇士奮鬪の狀を寫して居り此點に於て後三年繪詞と共通點を有するものとしてゐる。「聖德太子御繪傳に就て」(澤村專太郎、聖德太子論纂)は太子崇敬のために御像を圖繪若くは彫刻に製して太子に因緣深き寺院に安置して居つたが、是等より少し後れて御行狀を畫圖に表はす事になつたので、それが藤原時代

に既にあつた、其後繪卷物の流行に伴つて太子行狀繪卷が現はれ、軸の圖繪を製する樣になると其風潮に從つて南北朝の前後から太子に繪傳の掛軸が多數に現はれた、これはまた淨土眞宗の如きものが太子崇敬を鼓吹して佛教弘通の方便とした事に歸因すると結んでゐる。「康樂寺流の畫家は淨賀を以て其端緒を開いたものと見るべきで、覺如と同時の人であるが、世間流布の親鸞傳繪の根本的のものに筆を染めたと言へると共に、眞宗と繪傳との關係を考ふる一つの聯鎖であらうといひ、「宗達の扇面屏風に就て」（田中豐藏、同誌）は主として醍醐寺所藏の扇面屏風一雙に就て、扇面の配置法は恐らく現狀の通りではあるまいもとは扇流しの一種であつて是等の扇面形は他の金地屏風に畫かれたものを改裱の際に畫の部分だけを切拔いて今の金地屏風に張つたものであらう。其畫扇の構圖は寫經下繪より影響を受けたものであつて其筆は大體に於て古大和繪の復興を目的とし漢畫及び蒔繪の感化を受けて居るが、簡素なる圖樣の裡に無限の情趣を寓し、豐麗なる

裝飾畫的効果の下に表現したるは全く宗達の獨創であるとして居る。「名古屋城上洛殿內の探幽畫」（瀧精一、同誌）は其帝鑑圖が彼一代の傑作として推賞すべく殊に彼が二十五歲頃の筆なるを思へば驚嘆すべきであると論じ、我近世初頭の文化は頗る渾沌であつて而かも自由放膽である、儒教も道教も佛教も皆其長所を採らんとしたが、德川氏は儒教主義を採用しこゝに永德以下と探幽との距離がある、彼が幕府の御用繪師たるは技術の外に幕府の文教方針に從つて其手腕を揮ひ得た事にもよるとしたのは、「東照大權現緣起考」（平泉澄、同誌）が其出來た年代を考證して眞名緣起上卷は寬永十二年に、假名緣起五卷と眞名緣起の中下二卷は十六七年に出來たのであるとし、併せて探幽が此緣起を畫いた時代は從來寬永十三年とされて居るけれども、それは十六年の冬より十七年春までとすべきであるとして彼の法眼になつたのは寬永十五年十二月廿九日であり、齋書きは彼の三十八歲（寬永十六年）以後とすべきであると言つてゐるのと併せて探幽の畫風及び性格を傳へて居る。

最後に史料に關する方面に眼を轉すれば「古事記及び日本書紀の新研究を讀む」（橋本增吉、史學）は津田氏が日本民族間に於ける文字の使用を百濟と交通したる以後に始つたであらうと言つたに對して、九州土豪と支那との交通が長年月に亙つて居つた事や、魏志倭人傳の記事等より推して、少くとも支那の三國時代或はそれ以前に起源を有すると信じると言ひ、記紀の編纂者は編纂の主旨に反する記錄は全然之を顧みないのみならず、或は故意に史料堙滅をした結果、九州北部の史實と大和方面の記錄との間に何等の聯絡も存しない事になつたので、大體に於て古事記註の紀年は比較的眞に近いものであり、それが崇神まで、ある事は、大和地方に於ける文字の使用が略崇神頃に始つたのであらうと推測し、「愚管抄の研究」（三浦周行、史林）は愚管抄の著者を慈圓とする說と之に反對する說とを擧げて剖判し、同書の編纂年代を論究して第二卷皇帝年代記の最後の書繼を除きては全部承久二年なりと定め、其內容には攝錄家中にありても特に九條家に對して滿腔の好意を寄せて居る事を指摘し、更に第七卷に就いては其道理を基礎とせる豫言であり、後鳥羽院討幕計畫を非難したものであつて、本書編纂の骨子はこゝにあつた丈著者の心血を注いだ點であるとして、本書の特色を闡明し、慈圓の閱歷と對照せしめ、靑蓮院の記錄文書中に存する慈圓の書狀其の他關係の史料を或は其用語より或は其思想より或は其內容より見て愚管抄のそれと比較研究し、同書の著者慈圓は其人であると斷じ、同書中法然に對する記事の冷淡なるを、兼實と法然との關係より考へて慈圓の著に非ざるべしとする說を排斥して居る。此研究は淨土宗側に刺戟を與へて賛否の說が續々發表されたけれども學術的價値の上より取立てゝ紹介するべきものはなかつた。「大日本史と史疑」（栢原昌三、歷史と地理）は前者が神功皇后を皇妃傳に大友皇子を帝紀に列したるは一見識たるに相違なきも、白石亦其著史疑に大日本史の影響を受くる事なく同一の論斷をなしたといひ、前者は公撰なるが故に曲筆を餘儀なくさるゝ所あるに反して後者は一野人の私著なるが故に率直の批判を加へた長所がある、殊に神功皇后の研究に前者が支那朝鮮

の史料よりの比較研究をせなかつた事は白石も非難したやうに、史疑の價値をますます大ならしむるものであると論じて居る。筆蹟に關するものには正倉院に尊藏されて居る「聖武天皇宸翰雜集」(内藤虎次郎、支那學)に就て述べ、其御筆致は秀勁絶倫と申すべきもので、王右軍の樂毅論を學んで其神味を傳へ給うたものである。本集は天皇が六朝隋唐人の集中より佛教に關する詩文百餘首を鈔錄されたものであるが、支那にも佚せる者ばかりであると言つて其作者王居士、隋大業主、眞觀法師、釋靈實、周趙王釋僧亮等に就て說明し、「菅原道眞の筆蹟に就て」(和田英松、國華)は道眞の筆と傳へて現存するもの、古記錄に眞筆と傳ふるものを一々擧げて、何れも眞蹟と斷ずる事は出來ない、道眞は能書ではあつたらうが、其書風筆意を明かにし得る資料がないのみならず、院政時代にはまだ能書の列には加はつて居ないが、神に祀られる事になつた後に於て、道眞道風共に弘法大師の後身であるといふ夢想の傳說から能書に加へ終に書道の神として崇敬されるに至つたのであると言ひ、「東家所藏の文書に就て」(魚澄惣五郎、中村直勝、歷史と地理)は東房長氏所藏文書中特に注意さるべき平安朝時代の賣券を擧げ、寛平錢二貫文で賣買された土地及建物が後には延喜錢陸貫文に、更に乾元錢伍拾貫文に賣却されたことを述べて、當時の經濟狀態特に錢貨の通用された事を注意し、「聖護院に於て發見されたる智證大師の眞筆と解脫上人の眞筆」(宮城信雅同誌)は最近偶然の機會より發見された智證大師將來目錄が覺忠僧都の手に傳はつた由來を說明し覺忠は忠通の子であるから、良房に奉つた目錄が彼に傳つたのであらうとし、峯定寺釋迦像から出た解深密經の抄出したものは解脫上人の自筆たる事を法相所依の解深密經を封じ法相擁護春日大明神を擧げた事や同時に發見されたものゝ中に上人の弟子覺遍の名見ゆる事より推論して居る「後七日御修法關係文書に就て」(中村直勝、同誌)は一々の文書名を定め、德川時代に於ける文書の特長の一として煩雜に流れ形式に走つた事を認め、これらが實社界と交涉少き公家側の文書に多きは、彼等の權威の失墜したためであると言つて文書の形式と時代との關係を說明せんと試みて

居る。而して材料を編輯したものには「五人組法規集」（穂積陳重）は承應四年武州新倉郡小檜村五人組帳以下明治四年武藏國多摩郡上大久保村御仕置五人組帳に至る各地の五人組帳、五人組御條目、伍什組合掟書、五人組帳前書、五人組手形、五人組改證文帳等を年代順によりて收集したものである。其他東京帝國大學史料編纂掛よりは「大日本史料」第五編之一、第六編之十八、第八編之七、「大日本古文書」追加八、家わけ第八毛利家文書一、幕末外國關係文書附錄三を刊行し、印刷局内朝陽會は「史林聚芳」第一輯を出し、日本史籍協會は「九條家國事記錄」、「續再夢記事」、「近衞家書類」、「幕府征長記錄」、「連城漫筆」を刊行した。なほ季刊雜誌として「系譜と傳記」の創刊を見た事を記して筆を擱く事にしやう。〔中村〕

朝鮮史　昨年の斯界の趨勢は苦心研究の業績の發表せられたものゝ比較的多量なることである。先づ總論的方面より見ると「古朝鮮の研究に就て」（原勝郎、民族と歴史）日本の古史的言語學的立脚地より研究するの必要なるを誡め、古朝鮮史の正しく理解さるゝ時は同時に古日本史の正しく理解さるゝ時なるを論じたものがあり、「朝鮮の歴史的觀察」（黑板勝美、朝鮮）には事大思想及家族制度を研究して朝鮮教化策の基とすべきを力說したのもあり。眞番郡の位置を決定する爲に重要な史記朝鮮傳の記載中にある眞番旁衆國欲上書見天子又擁閼不通の語が漢書朝鮮傳には旁衆國が眞番辰國と改まつて居り、何れが是なるか詳細不明瞭なるに係らず北宋槧本に基く「百衲本史記の朝鮮傳に就いて」（今西龍、藝文）見ると之が眞番旁辰國とあるから通行本に衆とあるは辰字の誤傳で、これ從來眞番郡の位置の研究の徹底せなかつた所以なるを論じたのもある。特種研究方面では「百濟五方五部考」（同人、同誌）「高勾麗五族五部考」（同人、史林）の二篇は餘程の勞作であつて、前者は隋書周書北史に見える此の事が、近頃發見せられた翰苑の注に引用せられて居る括地志の逸文に依りて更に明白になし得らるゝことを指摘し、中方古沙城、東方得安城、西方刀先城、北方熊津城、南方久知下城の位置と百濟人の氏姓、官位氏名上に冠する部名とを採つて五方五部の制定が熊津在郡時代から計畫せられ泗沘

に遷都して始めて實施せられたものらしいと謂ひ、後者は魏志に見ゆる高勾麗の五族、漢書注に見ゆる五部をば言語學的研究方法を以て推究すると、五部が都城内の區分で且つ貴族組織の一要素であり、五族か部族名であることが解ると論じて居る。「百濟に關する日本書紀の記載」（津田左右吉、滿鮮地理歴史研究報告第八）を吟味して神功紀に見ゆる百濟服屬の記事を百濟史實と對比し、書紀の材料として採用せられた百濟の史籍の記事に、如何に日本修史家が潤色を加へたるかを論じ、併せて任那新羅高麗及び吳に關する書紀の記載を吟味して書紀が史料としての價値如何を嚴密に判定せむとしたのは日本古代史研究上にも兎に角稗益を與ふる有益なる研究であらう。「朝鮮高麗朝に於ける東女眞の海寇」（池内宏、同書）は高麗朝初期より尹瓘の女眞征伐に至る間、海賊として頻に高麗の東海岸を掠め、又た鬱陵島の于山國を滅ぼし或は刀伊賊として我が邦を襲ふた女眞が、高麗より黑水靺鞨の假稱を與へられ　居つた所の城川江流域に居住した歳與平野の三十姓部落で、彼等が又物質上の利益を受くる

爲に高麗に朝貢し契丹にも通じたものであることを闡明し、「朝鮮の三開港場」（三浦周行、經濟論叢）は義滿の頃朝鮮と日本との交通回復し南鮮地方の諸港が我が使船の爲に開放せられたが朝鮮は對馬出兵以來緊縮方針を取り熊川の薺浦、東萊の釜山浦、蔚山の塩浦なる所謂三浦のみが對日特定の開港場として開かれた事情より當時に於ける三浦の我居留民狀態を統計的に述べ薺浦最も盛に、塩浦之に亞ぎ釜山浦の最も振はなかつたことを叙して中世都市發達の好例とし、朝鮮の官府が特産品の上納を容易ならしめ且つ其の生産を保護する目的を以て創設した令市なるものは、其の配給區域各々一定地域に限定せられ居つたことより、其の例として調査せし「大邱の令市に就いて」（黑正巖、同誌）其の結果を發表し、之が李朝孝宗時代に起源し藥材取引の機關として久しく重要の商業的地位を占めたものであることを證明したのもある。（英佛軍の北京侵入と朝鮮」（杉本正介、民族と歴史）朝野の狼狽の事情を述べ、朝廷先づ全景淳、申錫愚を遣して支那の形勢を探らしめ漸く清鮮間の通路の不安、英佛軍の北京侵

入徑路、講和締結の情況、南清土匪の情勢等を知るや廷議は富國强兵策に傾いたけれども、一般社會は不安狼狽して年來の事大主義に多少の變改を生ずるに至つたことを指摘したものもあれば、又李氏朝鮮初期の學が王廷の貴紳及び其子弟に在つて、其の宗とする所も朱子學の範圍外に出でず、從つて其の餘裕あるに任せて史學法制地理等をも試みたが、宣祖以後に李滉を中心とする新學風起り安鼎福、李肯翊之を繼いて第二階級以下の人士が學問の中心となつたと謂ふ「李氏朝鮮の學風の變遷」(今西龍、支那學)を述べたのもある。「朝鮮と甘藷」(名越那珂次郎、民族と歴史)は李朝二十一世英祖の二十九年に始て朝鮮に之れが傳來せし以來の經緯を述べ、日本海の陷沒しない以前の小殘片なる「鬱陵島」(坪井九馬三、歴史地理)が慶長頃對馬人に竹島磯竹島などゝ呼ばれた事情、及び高麗時代に起原し六曹の御用達をした商人である「京城の六矣廛に就て」(黑正巖、經濟論叢)之が他の諸國のギルドと根本的に異なるものであり而して之が甲午の變より特權を剝奪せられた事情、並に日韓併合成つて後統治權は統一せられて居つても、鮮人は却つて法律上にて獨立し、鮮人は宛も帝國内では治外法權を有して居る樣な現狀にある奇觀に對しては「朝鮮法系の歴史的研究」(淺見倫太郎、法學協會雜誌)の必要なるを唱へて明治四十三年の制令第一號に見ゆる韓國法令なるものが何物を意味せるか、朝鮮の規則に典禮の廢止を宣言せないで併合した爲に要するに典禮制度と法律制度との經過の際に矛盾牴觸混同の觀を生じたものであることを半島律令の沿革より論じたものがあるなど、隨分特種な興味ある研究發表が多い「南鮮に於ける慶長文祿の築城」(伴三千雄、歴史地理)は一昨年來の續篇で西生蒲、せいぐわん、機張、東萊、釜山、龜浦、梁山、竹島、加德島、熊川、巨濟島、昌源、固城、泗川、諸城の地點を考證確定せむとした歴史地理的のものもある「新羅文武王陵碑に就きて」(今西龍、藝文)海東金石苑の解讀力の不充分なるものを苦心推考して行文の排列を整へ順序の錯雜を正し、之に依つて三國史記に見ゆる金閼智が星漢王で、小昊金天氏の子孫なる神人であると謂ふ傳說の存在したことを知り得る貴重な史料と爲すことが

出來ることを謂へる、高句麗沙門慧便、慧慈、僧隆、雲聰以下幾多の朝鮮僧侶が日本に歸化して佛寺を草創し「佛教史上より見たる日鮮の關係」(手島文倉、宗教研究)の決して沒交渉でないことを謂へる、國語と朝鮮語との關係を徵證した「朝鮮語斷片」(稻垣光晴、民族と歴史)、「日元間の高麗」(青山公亮、史・雜誌)なぞ何れも注意すべきである。若しそれ李王家音樂の雅樂、俗樂、軍樂の別があつて雅樂が支那古代のものを傳へて之を遺存して居る奇現象俗樂が法、宴二樂に分れてそれ〳〵儀式又は公私の宴會に使用せられて居る現狀、軍樂の減びた理由、乃至之を統率せる役所の掌樂院、國樂司、掌樂課の變遷を經て今の雅樂隊となつた歴史を述べた「朝鮮音樂考」(田邊尚雄、東洋學藝雜誌)は高麗恭愍王十九年に支那から雅樂樂器を贈らるゝと共に支那俗樂も傳來したること、並に朝鮮固有樂器の桃皮觱篥であつて、新羅時代に三竹、三絃の工夫成り、百濟樂は滅亡しても高麗樂は空前の發達を遂げ李朝に入りては朴堧によりて大改革大整理の行はれたことを述べた「朝鮮の音樂」(田中德太郎、朝鮮)と共に朝鮮音樂の概說的記述である。尙ほ紀行としては「新羅の古都を尋ねて」(橋川正、歴史と地理)芬皇寺、佛國寺、石窟菴彫刻等に新羅の古文化を偲んだものもある。〔那波〕

東洋史　昨年の斯界は支那政情の混亂と太平洋會議開催との爲、支那時事問題に對する論說の發表せられたものが非常に多い、今其の中から歴史的立脚地に立つて根柢ある所見を發表せし二三を一瞥するに、「支那の過激化問題」(松井等、東亞經濟研究)は目下の支那は事實上政治的社的混亂國家崩壞の渦中に陷れるも古來歴史的に自衞的獨善的處世方針の思想習慣が發達して居るから、露西亞風の過激思想が露西亞と同樣の現象を支那に起さないであらうと論じ併せて支那青年男女が所謂文化運動の意義を確認し過激思想が支那では無價値なことを意識する必要あることを警告し、「支那の自治運動」(清水泰次、外交時報)は督軍廢止運動に兆した該運動がやがて聯省問題を實現するに至るべきを謂ひ、「支那國際管理說と列國」(矢野仁一、同誌)の取るべき態度を論じて支那に於ける列國の特權は直接又は間接に支那自ら之を保持する力

無き爲自然に發生發達せしもので、これがブラント、バワース諸氏をして國際管理說を唱へしめる所以であるが、此の主旨から謂ふと稅關又は塩稅管理の如き諸制度を擴張して之を一般行政に及ぼすことこそ國際管理の哲理なるに、米國が此の說を認めつゝ列國の支那に於ける特權を拋棄せしめむとするは不可思議の思想と見るべきである。故に特權拋棄を以て國際管理の條件とすることは不合理であることを論じて居る。乃ち「支那の國際管理」（內藤虎次郎、太陽）は之が支那の安全を保障すると共に日本を牽制する手段で、華盛頓會議も結局は支那國際管理說に歸着するかも知れずと謂ひ、國際管理は實は眞の支那人の支那を促す所以で永久的に支那人を國際間の政治的被治者とするものでないことを謂つた「支那の國際管理論」（同人、表現）も出て居る。「支那の將來と太平洋會議」（鷲尾正五郎、外交時報）亦一讀を要する好文字である。總論的論說には「杜威氏の支那論」（稻葉岩吉、東亞經濟研究）あり、これは支那民族の保守的なる爲振はざることゝ其の保守的なる原因として人口過剩並に密集生活の濃厚さ加減に眩惑せられ居ることゝを擧げ、延いて產業革命問題に論及したるは「支那將來の企業と勞働問題」（前田幸太郎、同誌）と併せ讀むべきものである。「支那學問研究上の一特色」（田中萃一郎、同誌）は雪橋詩話に例を取つて此の書に財政經濟學術文藝朝儀制度有職故實を論じて居る通り、史學上の科學的研究の結果をも詩もて表現せむとすることの支那學問研究上の特色なるを謂ひ、又支那民族性問題に就いて、地方の氣風と個人の性質、天圓地方說と其の思想の由來、五行と四神及五數の根源、干支の發達順と其の起原、陰陽剛柔と南北の辨から「支那古代の民族性を論ず」（八木奘三郎、滿蒙之文化）にあり、「滿洲にて觀察せる支那民族の國民性」（寄藤好實、民族と歷史）を述べて長所として困苦缺乏に堪へ經濟思想に富む等十四條短所として公德心薄く國家觀念乏しき等二十條を擧げ水滸傳は能く支那國民性を描出せるを謂つて居る。尙ほ學問不振と知識減退との爲宗教の頽廢し、儒教の衰へし爲道德の頽廢、一般國民の自由精神及權利思想に根基せざる革命及び共和制よりする政治上の阻害、法律ありても

之を遵奉する道義心を缺き、之を强行する權力を備へざることを謂ふは「支那視察の所感を述べて日支關係に及ぶ」（仁保龜松、法學論叢）ものとする。蘇て政治經濟方面を見ること、これ亦夥多しき研究がある。先づ「釋富」（小島祐馬、支那學）の一篇は富の字に對する許愼の形聲說、劉師培の會意說を批判し、本來富と同義に祭祀に使用せられる福の字が富の字の異體と觀るべきものであることを謂へるは支那經濟研究上の出發點に一大新根據を與ふるもの、「經濟上より觀たる尙書の贖刑」（同人、同誌）が尙書の卷首と卷末との頗る疑はしきものであることを自ら證明せるものであり、「春秋時代と貨幣經濟」（同人、同誌）を考へて、支那古貨幣刀布錢の實質樣式をば史記漢書管子周禮の記事と照合して其の製作地を推知しこれが春秋時代には通行せしものならむことを謂つて居り、「尙書に見えたる五刑」（同人、同誌）より支那にて一般に刑罰や死罪の法定公示が春秋末より戰國の間に行はれて其の以前は決して專擅主義でなかつたことを知り得るを論證して居り、而して周代に天子諸侯間、並に諸侯相互間の盟約上より生ぜし「載書を通じて觀たる春秋時代」（同人、同誌）は諸侯の嫡庶相續問題及び平時に水利問題、凶年に食糧問題に關して紛爭の多かりしことを知り得る。「支那の銀に就て」（水田淳亮、東亞經濟研究）唐代に於ても南方支那は銀幣流通地帶なるも中部支那は銅幣流通地帶であつて、中央政府には銀坑開發の議も起らず反つて賤銀思想ありしは唐太宗の言辭に徵して知ることが出來るが、北宋南宋も亦銅貨以外の貨幣に對しては無爲無策にして銀幣の通行無かりしが遂金は共に銀坑の開發に努め、元亦此の爲强制勞働制度を採用したる程であるが、但元は之を貨幣とはせないで主として賜與の料に供したと謂ふ沿革を叙して居る。「漢代貨幣史論」（田中忠夫、同誌）と共に見るべき「北宋貨幣史論」（同人、同誌）亦此の問題と密接の關係ある宋の神宗哲宗徽宗欽宗時代の銅錢、鐵錢、紙幣の諸問題を論じて居る。更に戶籍の遺漏、回避、兼併的惡政に依る「明代の流民」（淸水泰次、同誌）が飢饉迷信等より一種の社會的勢力を形成し社會の崩壞顚覆の原動力を爲したから、明廷は本籍送還、稅金免除の特典を與へ、或は一

定の地に之を集めるなど苦心せし顚末を調査したるものもあるこ、又「清代の廣東貿易」(稻葉岩吉、同誌)を論じて江寧條約第五條の公行に就いての特權問題を述べ、廣東貿易が全く公行の獨占に歸し、外人が屈辱的待遇を隱忍しつゝ之に徒ひ、支那人が又廣東市舶司に官吏たらむことを希望した程相互利益の多かつたことを論じて一昨年來の結束を附したものもある。戰國時代より民間商業に存せし駔儈が漸次發達の機運を生じたるも政府の抑商主義から賤商主義の政策の秦皇以來甚だしくなるや商人の社會的地位は愈々低下して遂には駔儈も賤業視せらるゝ樣になつたが、尙ほ經濟上の機關としては缺くべからざる役目をして戰國の駔が兩漢から駔儈となり、晉唐に儈となり戰國の牙が牙門牙郎市牙等の名目の變遷を經て唐に至つて儈と合併して牙儈となつたことから互市と牙儈との關係、牙帖の發行權牙行の現狀に說き及ぼせる「駔會、牙儈及牙行に就て」(稻葉岩吉、同誌)の問題及び茶貿易の支那及び塞外民族に與へた効果と弊害とを見た「塞外茶貿易論」(田中忠夫、同誌)、茶の原產地を上部緬甸とし一七八〇年カーネル・キイドの栽培に創まつた印度の茶業が支那茶と對抗して今日の隆盛を招いた經緯を探り將來を憂ふる支那人が對印度茶政策に畫策する所あることを述べた「支那茶戰と英國」(柏田忠一、同誌)、尙ほ支那茶の消費生產交易茶政の沿革を概說した「支那茶業史論」(田中忠夫、同誌)等は支那の蠶業及機織業」(中田豊衞、同誌」と共に支那經濟史上見るべき論說である。「明代の救濟制度」(清水泰次、經濟論叢)が子供婦人、老人疾病者を目的とし其の財源を和糴の名にて强制的に國庫收入に課せしこと、「明代の皇族」(同人、國家學會雜誌)が皇室の藩屏とせらるゝ政策の下に多數となり、萬曆一統紀要には親王二十九、郡王三百二十五を數ふる程になつた爲皇室經濟上の問題を惹起し、先づ扶持の減額、終には出產防止の議をも生じたこと、「明代の田賦につきて」(同人、東洋學報)明史卷七十八に見ゆる官田五升三合民田三升三合重祖田八升五合五勺の數に誤謬あるを論じ、大明會典王圻の文獻通考の記載の不正確にして所有支配兩權の官に在るものと所有權のみ官に在るものとを混同記載せる

ことを指摘するなど、政治經濟方面は可なり賑かである。一五一四年以來の葡人の支那渡來由來、明の成祖が中官尹慶をマラッカに遣しマラッカ乞援使の支那に來りし理由年代、タマン占據時代の葡萄牙と支那との關係、廣東懷遠驛の委細、使節ピレス一行の運命、アンドラーニの暴行より葡人の驅逐せらるゝに至る迄の事情を述ぶる「葡萄牙人支那渡來顚末」(矢野仁一、東亞經濟研究)、苛酷なる負擔兵亂流賊の害、旱魃水災、蝗害とに苦しめる上に交通不便の爲農民の保守的となり品種、栽培法施肥の改良をも爲さず、奸吏の誅求亦甚しく商人の爲に利益を壟斷せられ此の上防穀令等の實行をせらるる時は其の產額愈減少すべきことを論じた「江蘇省に於ける稻作に就て」(瀨川政雄同誌)。及び史實の研究より社會組織に變化あることを認むると共に如何にして此の變化の起りしかと云ふ原因を究めずして聖人を考へ以て治道の標準を知らしむる思想ありしことより見て封建制と郡縣制の折衷說を爲すに至りし「顧炎步の郡縣論」(岡崎文夫、支那學)共に亦此の方面の好文字である。次に思想方面には「抱朴子と道家思想」(小島祐馬、同誌)この關係を論じ抱朴子の神仙たるべき修業法を說く所は道家思想に基きたる長生術で、其の社會思想として道家と相容れない儒家を祖述して居る奇現象は時勢の推移上已を得ざることなるを云つて居るのがある。禮記禮運の大同小康說は天下は公共の物で君主或は其の他の者の私すべきものでないことを理想とする說で從つて壯者の働くべく老幼は養はるべきものであると謂ふのはつまりこれ爭鬪的現實世界を漸々に禮樂を以て大同社會に發達せしめると謂ふ儒家思想の根原となすものであると謂ふ「禮運と秦漢時代の儒家」(本田成之同誌)思想との關係を闡明せる、「三國時代の經學に就いて」(同人、同誌)綜合的學者として王肅、思想家として何晏、王弼が經學上思想上一大轉機を與へたものであることを說ける、「楚辭に現れたる思想に就いて」(同人、同誌)之が經の思想と無關係なるや否やを論じたる、「儒家と革命思想」(小島祐馬、同誌)この關係を討ねて史記儒林傳にては轅固生は革命を是認し、黃生は非認し居るも後者の思想は周制を是認せむとするより起り、前者は周制を理想

化せむとする所より胚胎する思想なることを議せるもの又「漢書藝文志の歴史觀」(丹羽正義、哲學研究)を討ねて劉向の歴史觀の客觀的事實に基いた歴史的自覺に立脚せる知識であつて、孔子の時を限界として正學と支學とを二分する考あることを指摘せる、將た「陶隱居に就て」(高雄義堅、六條學報)彼が儒佛二教に對し寛容的抱合的思想ありしことを直誥と四十二章經との內容を對比して論證し、眞誥が北俱盧州の說明に模して仙境を描出したものであることを謂へるなどは、古代ギリシャ哲學の混沌と相似た老莊の道もアナーキズムと異なることを論じた「老莊とアナーキズム」(服部宇之吉、哲學雜誌)、開教、教會組織、教理研究、教權確立、繼承退化の五時代に劃して先づ後漢張陵より西晉の道士に至る迄を論述したる「道教發達史概說」(常盤大定、東洋學報)と共に看過すべからざるもので、佛教及び印度方面に關しても「釋尊時代印度の思想及信仰」、(赤沼智善、佛教研究)、「漢譯雜阿含經に就て」(增山顯珠、六條學報)等がある。前者は巴利語原典に基いて紀元前五六世紀の印度一般思想及信仰の情態を說き長阿含經第一梵網經に見ゆる過去に關する十八見、未來に關する論四十四見の哲學的思想的見解を擧げたもので、後者は四阿含經の成立の同時代でないことを論證したものである、此の外無著に唯識瑜伽の根本說を教へたと謂ふ傳說を有する彌勒及び無著の著書、年代を論じた、「史的人物としての彌勒及び無著の著述」(宇井伯壽、哲學雜誌)、支那傳に云ふRahulaが西藏傳に云ふRahulabhadraなる論證を試みた「羅候羅卽羅睺羅跋陀羅」(同人、同誌)、又一昨年ケムブリッヂで發見したヘルレン教授の圖書中其の六分の一を占むる醫方藥物書中に存する四種の吠陀小典中のアーユル吠陀八章の醫方及びリグ吠陀中の外科的手術を述べ、ヘルレン圖書中に尙八部の此の方面の史料あることを謂へる「印度の醫方及藥物」(泉芳璟、佛教研究)なぞ何れも印度に關する有數なる研究報告であつて、「東晉時代に於ける沙門と諸名士との交遊に就て」(佐々木功成六條學報、禪宗、)帛尸梨密多羅を中心とする王導、庾亮、謝鯤、桓溫等、竺潛を中心とする何充、孫綽等、支盾を中心とする王洽、許詢、袁宏等、康僧淵等十一沙門を中心とす

る交遊慧遠を中心とする十八賢の交遊を說述したるも、釋道安が聖典註釋の先驅者として經錄を編輯し其の體裁を整理し、分科の施設を試み講學宣傳に功獻したことと佛陀羅沙が錫崙語の三藏を巴利語に改譯したることは佛敎史上特に注意すべき重大事なるを謂へる「道安と Buddha Ghosa「(足利宣正、六條學報)と相並んで一讀の値がないでもない。其の他「迦膩色迦王の年代に就て」(西文正、同誌) Kenedy の紀元前說Cunninghamの紀元後說を批判したのもある。若しそれ「支那に於ける佛寺造立の起原に就いて」(大谷勝直、東洋學報)、明帝の白馬寺、靈帝時代に安世高の豫章に立てた寺塔以下古代の草創に係ると傳へらる寺院及周の穆王時代に起ると云ふ造塔說を批判し白馬寺の名の三國時代に起り、塔の造建の漢末迄溯り得ることを謂へるに至りては此の方面の一大勞作であつて是非參攷すべき好研究である。文學史的方面で「本邦支那學革新の第一步」(青木正兒、支那學)として本邦漢學の降盛時代は音讀に傾き、衰退時代に訓讀に碎け來る現象より見て漢文音讀の必要なるを論じ訓讀が支那文法及意義の

不了解を來たす弊害あるを指摘して居るのは傾聽に値する所說であつて、「南北學術の異同に就きて」(武內義雄、同誌)　先秦古書の記載に徵すると此の事は明白で、北學の魯、南學の楚を中心とせしことを證明し、之が齊の稷下の學隆盛を極めてから兩系相混同し道家者流思想の北方に波及せしも稷下以後で、其以前には北に道家者流なかりしことを論ぜるも亦興味ある研究である。「王弇州の文章觀と其の文章」(橋本循、同誌)は天巧を尊び心匠を師とし造化を尙び人工を斥け以て生氣生機生越の三者を橫溢せしめむとせしもので、「詩人としての胡承諾」(神田喜一郎、同誌)が李何李王の末流の陷れる膚郭の弊無く宏深奧博の風ありしは感舊集に見ゆる作にて知り得られる。「元代雜劇の創始者關漢卿」(青木正兒、同誌)の作劇手段の特徵の非作爲的にして滑稽越味に富めることを指摘せるも面白い。更に藝術的方面に屬せしむべきものでは、清初の自由風の代表として構圖に變化多く創闢の新境を開拓して其の畫語錄に因襲的畫法の破壞と個性的畫法の建設とを叫んだ「石濤の畫と畫論と」(青木正兒、同誌)、謝赫の

古畫品錄が氣韻を重んじ、姚最の續畫品が作家に等級を附せざる「六朝の畫論」（稻東猛、同誌）、白眼睥睨する愛廬的恬淡に基く書畫詩文戲曲小說の男性的性質を帶ぶる明の「徐靑藤の藝術」（靑木正兒、同誌）を論ぜる、「ペトルッチの『支那の畫家』の紹介及批評」（丸尾彰三郎、國華）は共に支那繪畫史上に寄與する所が少なくない。音樂に關しては玄宗の性格と其の環境より其の文化の世界的であり音樂流行が玄宗を中心として如何に殷盛なりしかと謂ふことを詳說せる「玄宗皇帝と音樂趣味」（那波利貞、歷史と地理）あり、史料の本文批評には「尙書編次考」（內藤虎次郎、支那學）があつて之は先秦古書の批評方法は古書中の事實を辿るよりも其の事實の變化を來した根本の思想の變化を辿ることの最良法であると云ふ見地から最初周公に關する記錄が中心として存在し、其の後諸子との競爭上道統を古くせむ爲に典謨諸篇の附加せられたものであらうと謂ふ卓見を提唱して居る。「爾雅の新研究」（同人、同誌）は釋詁が七十子を距る遠からざる時代又は七十子の末年に成されて其の後戰國の初迄に附益せられたものであり、釋言は其の次の孔子を素王とする時代に成つて稷下の學の盛となる迄に附益せられ、釋親以下釋天迄は公羊春秋の發達した荀子の前後から漢の高堂生迄の間に成り、釋地以下釋水は戰國より漢初、釋艸から釋獸迄は漢初迄に、釋畜は漢の文景頃に成りしと謂ふ創闢の說を述べて居る。「神仙說から見た列子」（靑木正兒、同誌）も亦列子の本文研究であつて、姑射山、崑崙山、化人宮、五神山、終北國、華胥國諸說は何れも淮南子よりも新しきものと思はるるを以て列子は蓋し漢初黃老全盛期に編纂せられたものであらうと謂ひ、「支那の上代に於ける希臘文化の影響と儒敎經典の完成」（飯島忠夫、東洋學報）は顓頊曆が希臘のセリユーカス曆の影響を受け、三統曆のカリッポス曆の反影で、十二律がアリストクセヌス法の傳來せるものなる以上は、律曆の記載の研究より左傳、眞古文尙書が前漢末詩經易經が顓頊曆以後の編纂に係れるものであることを推論することが出來ると主張し、漢書藝文志に見ゆる「子思子に就いて」（武內義雄、支那學）其の首篇が今の中庸なりしことを論證するあり、「唐石刻觀經に就て」（同人、六條

學報）唐の上元年中の刻に係る邢州本觀經拓本が通行のものと文字の出入あるが、これが天台所覽の本ならむことを論ぜるあり、「曾子考」（同人、支那學）も亦此の類の論說に屬する。史評方面のものと觀るべきものには「公羊家の觀たる史記」（小島祐馬、同誌）が揚贊襄の龍門書羽の說に據ると之を崔述の史記探源の說く如く劉歆及後世人の竄亂せるものとは觀ないで、公羊春秋の義例に據りたるものと考へられて居ることを指摘し、「漢書地理志に就いて」（岡崎文夫、同誌）實際行政區域と法規行政區域との區別不明瞭なることから星分にて地域を謂ふ劉向の說と、地域によりて風俗を條した朱贛の說を其の儘書下して居るのは體例の義を失せるものであると謂ふ批評を加ふる者あり、史料の發見と紹介說明方面に於ても「富岡氏藏唐鈔王勃集殘卷」（內藤虎次郎、同誌）、上八城相公書に基いて其の動機と目的とを探り、校勘と縮臨本の校正とは謙堂自ら之に從事し、塩谷宕陰、大槻盤溪、安井息軒等の之に助手たりし經緯を闡明し以て「松崎慊堂の開成石經縮刻に就きて」（高橋美章、同誌）の歷史を紹介するもの、「元史研究の一資料」（神田喜一郎、同誌）として明の弘治飜刻本の王惲の秋澗先生大集の貴重なるを謂ひ一例として大元光祿太夫平章政事兀良氏先廟碑銘が速不台の家の事を知るに重要なるものなるを謂へるもの、「唐賀知章書孝經につきて（同人、同誌）之が德川時代に長崎より傳來せるものなることを謂へるものが發表せられて居る。特種問題の研究は比較的多量で禹と塗山氏、解居父傳說、魯の秋胡氏、陌山桑蠶測に共通する「採桑傳說」（鈴木虎雄、同誌）が支那古代の情話として貴重すべく、之に關係ある「桑樹に關する傳說」（同人、同誌）が樽桑、若木、帝女桑、空桑傳說の數種あるもこれ皆採桑傳說の起りたると等しく山東河南地方に流行し以て古民俗の自然觀宗教心を窺ふべき傳說であることを謂つて居る。又「桃の傳說について」（橋本循、同誌）は其の具體的成立の六國以後の時代に在るを知ることが出來る。「火葬法の支那流傳に就いて」（那波利貞、同誌）も其の經緯不明瞭ではあるが、漢以後南北朝の間に西方外國より傳來したものであらうと思はれる節があり「續王亥」（內藤虎次郎、藝文）の標題の下に王國維が殷人

に女姓無きことを謂へる卓見を賞し、籀文が太史の名に非ずして讀の字であり、從つて昔人字書を作る者其の首句に大史籀書と記して其の下に史の專職たる讀書の文章を書せしを後人句中の史籀の二字を取つて篇名とせしより固有名詞の如く誤らるゝに至りしものなることを指摘したるは支那古代史研究上に一大炬火を投ぜるもので、ボストン大學總長ワーレンの最古天地開闢論の說から、バビロン人の宇宙なるダイアグラムは須彌山圖と酷似し又此の思想は淮南子墜形訓の記載と類似あれば支那上古天地開闢說の益〻西方起原なるを知り得ると云ふ、「支那上古の開闢傳說補遺」(小川琢治、同誌)と共に貴重なる研究である。「卍字源流攷、附、火・連火異同攷」(那波利貞史林)は卍字が太古中亞に發生し希臘波斯印度支那へ傳播し、木燧の旋回運動を記號的に製したもので佛教家の創造でないと謂ふことから又支那の連火は殷以前に西方から傳はつた卍字に起原し、火の字は燈明の象形で兩者起原の別なることを謂つて居る。淮南子の十二律の中應鐘と夾鐘との數に誤あることを指摘したのは「淮南子の十二律數の誤と其の正數」(田邊尙雄、東洋學藝雜誌)で「九九に就きて」(三上義夫、東洋學報)此の聲が宋代に起りしものであることを論じたのもある。「金文に習見する常語」(神田喜一郎、支那學)、「支那古文書の研究」(同人、歷史と地理)、「仙人生活」(高瀨武次郎、太陽)「顧千里先生年譜」(內藤虎次郎、支那學)、及び其の學博覽多識又龔藏に富み支那文化に暗に與へたる裨益の大なる盛昱の功績を述ぶる「盛伯羲祭酒」(同人、同誌)「金薤考」(濱田耕作、史林)等も何れも斯學に裨益を與ふるものである。「女眞種族の同源傳說」(內藤虎次郎、民族と歷史)は金國を起せし時に生熟兩女眞に關する傳說が變化して一種の移住傳說となつた經緯が一般古傳說研究上注意すべき類例の一なることを注意し、「周代に於ける家屋建築の樣式について」(那波利貞、支那學)は周代に切棲式、四方流式、圓錐圓筒式の三式並び存しこれが後世支那諸建築の根本樣式となりしことを謂ふものである。可汗の名は蠕々より使用せられ從來塞外民族に慣用せられて品位の下落した單于の稱號に代りしことや、可敦はKagan の變化した han に女

性を示す語尾 ai の加はりて成りし理由や、此等の稱號が朝鮮古代稱號と關係あることを論じた「可汗及可敦考」(白鳥庫吉、東洋學報) 契丹人の信仰は勿論固有のものもあるが其の大部分は大抵支那から傳來したもので蓋し太宗が後晋を亡して中原を蹂躙したる際愈々深く支那文物に接したるより見ると其の信仰に支那のそれの痕迹あるは偶然ではないと謂ふ「契丹人の信仰」(松井等、滿鮮地理歷史研究報告第八)、一五七二年蒙古鄂爾多斯部晉克圖克台徹辰洪吉台の二弟等が中亞の托克摩克に出兵して阿克薩爾汗と實喇摩楞河に敗戰したるは兄洪吉台の素志に基ける出兵で、翌年洪吉台自ら哈蘇羅で雪辱戰を試みたる事から、其後蒙古族の中亞侵入は度々行はれ其の結果は今日の如く外蒙古の諸部の西方へ發展することゝなつたことを論じた「明末清初に於ける蒙古族の西征」(和田清、東洋學報)元の中書省、尚書省、門下省、行中書省、御史臺、行御史臺、樞密院、行樞密院の官制の性質及び目的を調べ、之をラシドウデンの記載と比較研究し、又元代の鎮戍、探馬赤手號、乞、の諸軍制を論じた「元代の官制と兵制」箭内

亙、滿鮮地理歷史研究報告第八)、明史大明會典等に見ゆる洪武年間の田八百萬頃は田地山落をも合算し弘治年間の四百萬頃萬曆年間の七百萬頃は田地のみを分算せるもので支那人が其の內容を明かにせず但數字のみを揭げた誤謬を訂正する「明代の田地面積について」(清水泰次、史學雜誌)、は元より、「萬曆時代日本人のマカオ驅逐に就て」(矢野仁一、史林) 命令の出だされたのは萬曆四十二年で此の年は恰も德川家康が日本在留の天主教各會の外人神職傳道士及日本人信徒を海外に放逐せし慶長十九年で、日本より放逐せられた者が皆マカオへ逃れたと謂ふ說とは矛盾を生ずる譯であるが、之はパジェスの謂ふ如くマニラへ向はむとして交趾へ逃れたる說が當時のマカオの事情と照合して眞に近からむと思はれ、宗懍の荆楚歲時記や古今藝術圖以來支那記錄に現はる牙纛は五胡時代に外國より傳來し、日本へは更に嵯峨太上天皇の頃傳はりしもので而して今日フラココと稱するは葡萄牙語バランソを訛りしものかと謂ふ「牙纛考」(原勝郎、藝文) も主として支那に於ける此の遊戲の沿革を中心として論じて居る

其の外元の昭宗の年號なる宣光が朝鮮普濟尊者浮屠碑に記せられあることを指摘する「讀書雜記」（神田喜一郎、支那學）、「杜陽雜編に見えたる韓志和」（那波利貞、同誌）が今昔物語に見ゆる飛驒の匠なるや否や、及之が酉陽雜俎に見ゆる王固なるや否やを疑つた「同補遺」（同人、同誌）の如き思付きもある。次に歴史地理的研究方面では先づ「唐十道の研究」（井上以智爲、史林）を擧げなければならぬ。之は支那法制史上劃代的意義ある唐の十道の設置由來、區分命名境界目的變遷を調査して當初單に地理的區劃たりしものが、景雲開元年間には漸次地方行政區劃と變じ更に安史の亂以後封建的領域となりし所以を論じたもので「赤土國考補遺」（高桑駒吉、史學雜誌）は一昨年よりの論爭の餘派を收めて居る。尙ほ此の方面に注意すべきものには「遼代の漢城と炭山」（箭内亙、東洋學報）「禹河」（藤田元春、支那學）がある。前者は遼の太祖の最古の居城漢城の位置は炭山が察汗格爾の西南三十里の地點なるより觀れば今の石頭城子なるべきことを考證したもので、後者は黄河々道の最古の禹河時代は渤海灣頭沽海口から西安州に至る間に二百粁の入江存在し禹河は大行と大伾兩山脈の間を東流したるものならむと謂ふことを考證したものである。以上述ぶる十二方面の外にて更に紹介及批評に於ては「ラウフエル氏支那の古代に現はれたるシベリアの美術及文化の影響」（高橋邦枝、東洋學報）「パウルペリオ敦煌千佛洞圖錄」（國華）、「カルルグレイン氏原支那語考」（石濱純太郎、支那學）等がある、就中最後のものは目新しき研究方法に據り、原支那語には語尾變化の存せしものなることを論語、孟子、詩經等に見ゆる第一人稱代名詞の使用法に基いて論證し、此の見解より左傳を見る時は左傳は周末に成りし別史なることを確認し得らるゝ次第を謂つて居る。以上は單に紹介であるが其の純粹批評物は「コルヂエ氏の新著マルコポーロを讀む」（桑原隲藏、同誌）であつて特にバタクシャン、支那に於ける金銀の比、雲南地方の貝貨杭州の回教徒、日本とナフーン、等の諸條を擧げて眞摯なる批評を加へあるは有益なものと謂ふべきである。以上便宜上十三方面に分つて紹介する所は昨年發表せられた東洋史關係の論著の

全部を網羅し盡した譯ではないが、先づ其の主なるものは擧げ得た心算で、以て昨年斯界の大勢をトすることが出來ると思ふ。尙ほ紀行としては「廬山煙雨浙江潮」（松井等、歷史地理）「雲崗日錄」（木下杢太郎、太陽）「武英殿古物陳列所」「北京阜城門外柵欄兒の耶蘇會地」「北海の喇嘛塔に登臨して」「淸史館」「大隆善護國寺」「訪書と琉璃廠書肆」（以上那波利貞、歷史と地理）の數篇あり、雜錄にして而も權利、客作、壽陵、畫眉、店舗等の字義並に其の沿革に就き珍らしき出典を示して解釋を試みた「竹頭木屑錄」（加藤繁、史學）の如きものもあり、多幸なる一箇年を送つたものと觀るべきであらう。（那波）

西洋史　昨年の西洋史界は特に不振の樣に見受けられるが、二三受驗參考用のものを除いては一般史的性質の述作として推奬すべきものが殆ど皆無であるのは殊更に寂寞を感ぜしめられるのである。此間獨、文學史方面に於いて、恰もかの詩聖ダンテの六百年忌に際會した秋冬の交に、多數の紀念的論著が公にせられたこと、ふことは特筆に値ひするであらう。「ダンテと其時代」（黑田正利）は著者が多年の研鑽に成つた苦心の作で、其時代環境其生涯其著作に關する研究的な面も情趣に富んだ叙述は讀者の感興を深からしめるに相違ない。「詩聖ダンテ」（中山昌樹）も亦「神曲」の譯述者たる著者が、詩聖の一生と其作物を各方面から論究せる稀有の大著として尊重すべきものである。京都文學會の機關雜誌『藝文』は特にダンテ六百年記念號を刊行し、詩聖追憶の料として將たダンテ研究に志すもの好指針として、甚だ恰好なる論說感想紹介に亙る十數篇の記事を掲げて居る。亦「詩聖ダンテ」と題し諸家の論文七篇を收錄した小冊子が大阪朝日新聞社から發刊されたが、是れ又注目すべき紀念出版物と稱することが出來やう。同じく文學史界の好著として「近代獨逸文藝思潮」（成瀨無極）が公にせられて居る、既に諸雜誌に掲載せられた草稿を蒐輯したものではあるが十九世紀獨逸文壇に於けるロマンチシズムとリアリズムとの消長推移を暗示するにある著者の目的態度は各篇を通じて窺知することが出來る。美術史の方面では、日本美術學院が「泰西名畫家傳」の叢書刊行を計畫し、ラフアエル。チイチア

アン・チイントレツト等ルネサンス期の巨匠から近代諸家に及んで、逐次、數多き圖版を入れた諸氏分擔の譯著を公にして居る。經濟史及び經濟學史に屬するものとしては「ロシア經濟史概說」(佐野學、國家學會雜誌)「個人主義經濟學說と其環境」(細貝正邦)を擧げねばならない。前者はロシア經濟史の西歐の夫れと面目を異にせる其特質を列擧し其時代區劃を論じて居り、後者は近世歐洲に於ける通商工業の發展經濟界の推移より產業革命に到る徑路を說き、其間に發現を見たケネーの重農學說スミスの自由放任主義からマルサスの人口論リカードーの分配論價値論に及ぶ經濟學說を論述したものである。政治學說の變遷を叙せる「歐洲政治思想史」(高橋清吾)は希臘時代から近代に亘る代表的思想家の政治論を其環境背景から觀察して說明を試みたものである。

現代史に關する論著は例の如く比較的最も賑やかな觀を示して居る。先づ「米國と世界大戰」(村川堅固)は參戰前後に於ける米國の內情對外的地位を說き其眞相を闡明して、日米關係の益々密接を加へ來れる今日、邦人の米國に關する知識を確實豐富ならしむるを目的としたものである。「太平洋外交史」(淺野利三郎)は題名の示すやうに太平洋問題の史的記述を試みたもので、忠實と平易を旨とした一般人士の好參考書である。「世界史の行方と太平洋の問題」(坂口昂、大阪每日新聞)は現代世界史の中心舞臺となりつゝある太平洋周邊の形勢を、古代の地中海世界に對比し、往昔兩方面の主人公であつた羅馬帝國と支那帝國との文化史的使命を論評して懷古の筆を遣つたものである。「巴爾幹外交史論」(信夫淳平)は巴爾幹の事情に通ぜる著者の得意とする該半島を中心とせる最近十年間の外交史である。「最近世界史の大觀」(時野谷常三郎)は僅々百餘頁の小冊子ではあるが過去五十年間の現代史を概觀して列强の內外政策を說き一般の風潮を指示して世界大戰役を誘起せしめた史的事情を明かにし要約宜しきを得た好著である。

「町人學者」(坂口昂、太陽)は實業家にして自由主義を標榜せる學者思想家たるサー・ヂョーヂグロートの生涯を說き、アテネの民主政治に憧憬の念を捧げた其のギリシ

ヤ史研究、選擧法改正後の英國議會に於ける地位、ロンドン大學創立に對する功績に論及し、彼の町人學者たる面目を彷彿たらしめたもので傳記の方面に於いて注目すべき一篇である。「領海三海里制の由來」(板倉卓三、史學雜誌)は近世に於ける領海問題の國際法學上に於ける諸說を擧げ其沿革を說き併せて此問題に關する實際上の爭議其解決の始末に及んで居り、「中世紀に於ける英國の王職」(占部百太郎、史學)はアングロ・サクサン族の時代から十四世紀末に至る王職の意義、其權能の沿革を憲法史上から說いたもので、共に法制史上に於ける有益なる論文と云ひ得るであらう。(植村)

考古學　大正十年の考古學界は研究の發表に於いて特に一時期を劃する樣な論著を見なかつたし、發見の方面でも、朝鮮慶州での空前の埋葬物の出土(「慶州の發掘品」濱田耕作、大阪朝日新聞)を外にしては特に目を惹くものはない。然し數年來顯著となつた調査研究の新機運は昨年も暎々裡に順當な進域を示して、將來研究の基準となる確實な資料の提供が其の數を增し、注目に値する研究の

發表またなしとせなかつた。今例に依つて其の業蹟を概觀するのであるが、一々の細かな事項は專門の雜誌に讓つて、こゝには其の內で主要な、そして特殊な論著の五六を擧げることにとゞめる。

數年來新機運の中心を形造つて居る我が石器時代の方面では、第一に續々と各地の遺蹟の精細な調査報告の現はれた事を擧ぐべきである。卽ち「薩摩國日置郡西市來村貝塚に就て」(山崎五十麿、考古學雜誌)「同出水貝塚發掘報告」「同指宿土器包含層調査報告」(以上濱田耕作、京都大學考古學研究報告書)「陸前國松島村通珂崎遺物包含層發掘概報」(大山柏、人類學雜誌)「遠江蜆塚に就いて」(榊原政職、同誌)「相模國諸磯石器時代遺蹟調査報告」「久比里貝塚に就て」(以上同人、考古學雜誌)等がそれで、何れも同代の研究の基礎となる土器の特色を最も重要視してその上に將來の學說を建設せんとするの傾向の著しきものあるは注意を惹く。この同時代の土器を對象とした研究としては「琉球伊波貝塚研究の基礎」(大山柏、人類學雜誌)と「貝塚式土器文樣に就きて」(池上年、考古學雜誌)と

の興味ある二編を見た。前者は主として同貝塚の土器研究に對する自家の方法を論じたもので、土器調査の主要點である形態裝飾製作の三方面中特に裝飾の研究に就て此の貝塚に著しい幾何學的紋樣を取つて、此の類の紋樣としての可能なるだけのあらゆる紋樣を想定して、其の間に系統を立て、問題の土器が、かくの如き基本紋樣が如何に結合し、また全體として系統中のどんな位置を占めるかを檢せんとする新しい方法を論じたもので、形態研究でも個體に於ける各部の研究と型態分類に重きを置いて、こゝにも一の新しい分類を示してゐる。これに對して後者は土器の基礎形態の起源を考へ、三河國西尾貝塚發見の土器に現はれた所謂アイヌ式紋樣を資料として、此の表面裝飾が主として緊結から來たこの起源に遡り、更に一々の紋樣の發達變遷の痕を綿密に研究したもので、其の上下帶間の結目が紋樣として漸次複雜化して行く徑路の考察や、龜甲紋樣變遷の系統の觀察などに注意すべき見解が多い。

石器時代の人骨に關しては「武藏野及び其附近の有史以前の人骨に就て」（鳥居龍藏、武藏野）の概括的記述をはじめ「日本石器時代の赤き人骨に就て」（小金井良精、人類學雜誌）は陸前氣仙郡中澤濱貝塚から掘り出された二十三體の人骨中、腦頭蓋及び顏面骨が酸化鐵で染つてゐる男女七體の狀態を擧げ、同じ人骨が陸前宮戸島、越中の大境からも出た事と併せ考へると、此の如きの風は所謂アイヌ、彌生式兩系の石器時代人に共通したもので、それを以て埋葬の際丹を振り蒔いたものが附着したのだらうと云ふ松本博士の說に對し、上記大境の遺跡が住居の跡であることゝ、當代の土偶に赤色を塗つたものゝあること等から推して、是は當代人が身體を赤く塗る風習のあつた結果、扮裝を施した屍が軟部消失の後色料が骨に移着したと見るべきであると論じたもの、「考古學上より見たる赤き人骨」（鳥居龍藏、同誌）は同じ問題を土偶其他の遺物の示す處に基き、當代人の既に裸體ではなかつた事を擧げて、赤色を塗る風習は主として顏面のみに限られ、また一の地方的風習であるのを論證しようとした。人骨の示す特徵から我が石器時代の人種を論じたものとして

は「出水貝塚の貝殼獸骨及び人骨」（長谷部言人、京都大學考古學研究報告）の一編の發表を先つ擧ぐべきである。これは薩摩にある同貝塚發見獸骨の詳細な報告を目的とした記述ではあるが、其の人骨の示す特性を以て從來發見調査せられた各地の石器時代のそれと比較研究を試みて、出水骨格の占むる位置を明にすると共に、全般に亙る特質の上から、我が關西の石器時代人はアイヌ祖先と某人種との中間型を示すものであると斷じて同代の人種問題の解決に一の科學的準據を提供すると共に、當代是等の人骨と伴出する遺物は大體一樣のもので、此の外に特に如上の某人種に屬すると見るべき別の遺物が認められない處から、兩人種の接觸は古く行はれて、石器時代に既に一の混血人種となつて各地に分布したのであらうとの自家の見解を示してゐる。"Notes on the Stone Age People of Japan"（松本彦七郎、The American Anthropologist"）は昨年までに到達した我が石器時代の人種に關係した諸般の事實や其の研究を網羅して、內に自家の新研究を述べたもので、また中に傾聽すべき所說が多い。著者はこれまで

人骨を出した主なる遺跡の概觀から土器紋樣の發達を各の所在の層位と併せ考へて、其の樣式の變遷を考へ、從來の說を排して我が幾何學的紋樣は曲線繩紋から漸次變化し來つたもので、其の樣は恰も人骨の示す處と一致し古生物學でのドローの法則と同じく、勞力と時間の經濟的法則に從ふたに外ならないと說き、日本の石器時代を前中後の三期に分けて、其の後期が次の埴瓮、齋瓮期に接したと見てゐる。人骨に就いては其の埋葬の狀態や伴出品から、拔齒の風習に關した事實の記載を試み、是等人骨の骨格としての一般性と氏の調査した靑島、宮戸島、津雲の著しい三種の人骨の特質を數へ、これが其の年代の順位を示してゐること、また現代の日本人及びアイヌの骨格を略說して、我が石器時代人はアイヌに近似し、而もこれより更にヨーロッパ人に近い、アイヌよりも進んだコーカサス人種に屬するもので、これをパンアイヌと呼びこれが如何にして此の島國に來り、また發展したかの骨格上から見た推論を下してある。長谷部博士の文と共に此の問題に就ての新しい見方を漸次具體化しつゝある樣

を示したものとして、やゝ記述は一般的ではあるが、昨年中の特に擧ぐべき論著の一であらう。

古代の人種論は以上擧げた石器時代人骨の調査からした新研究の外に、なほ九州の古代の住民に關する論戰の行はれたことを附記すべきである。「考古學上より見たる九州の古代民族」(濱田耕作、史學雜誌)「九州の古代民族に就いて」(喜田貞吉、民族と歴史)の二編がそれで、共にこれに關する在來の見解を纏めたものであるが、前者の立脚地が純然たる考古學上にあるに對して、後者は我が古傳說や零細な支那の文獻を土臺として成立つた歴史觀に遺物遺跡を傍證とした點が著しい研究方法上の相違を示して、從つて其の一致を見ることが難い。

我が考古學上の難問題の一である銅鐸に關した「銅鐸に就いて」及び「再び銅鐸に就いて」の二編(梅原末治、藝文)は其の研究を純然たる考古學の立場から試みたもので、銅鐸の形は支那の扁鐘に基き、而もそれは日本で作られたものだとの二個の前提から出發して、前者では先づ形式の區分をして、手法や分布上の事實から相對的年代を考へ、更に大和、安芸の兩地で伴出した遺物を、近時究明の域に達しつゝある上代考古學上の多くの事實と對照して、銅鐸の實年代は西暦紀元前後を中心として、其の下限が本邦古墳の營造期にも及んで大和朝廷との密接の關係の存在したことを論定したのは其の主眼點である。而してこれから從來學者の最も解するに苦しんだ銅鐸の古墳に埋葬せられない事實は、遺品自らの性質上から來るものであるとして、支那の古銅器の出土狀態とも比較を試み、こゝに用途に關した一の新な觀察の局面を開き、器に印した繪畫から當代の文化狀態を推し、また此の製作の技術は後に發達した我が鑄鏡術と關聯すべきものであるのを記してゐる。後編はこれについで銅鐸の化學成分から、嚮の各形式の相對的年代觀の確實性を確めて、銅鐸とほゞ實年代の等しい銅劍、銅鉾が互に分布の區域を異にした事實を注意して、彌生式土器と兩者に關係から考察を進めて、共に支那文化の所產である兩器に表はれた特異相は或は年代上の差違に依ることも解せらるゝが、その主因の交通路の關係に基くものではないかと、朝鮮南部

の新發見品から論じ、遺品の相違を直ちに人種の違つたものと解する從來の說に反對してゐる。蓋し今年以後の研究の問題となるものであらう。

上代の古墳墓及びこれに關聯した事項の調査研究は特に注意に値する樣な類に乏しいが、各地の古墳に關する調査報告の漸次確實なものゝ加はり來つた傾向と、和歌山縣、三重縣、岡山縣等の史蹟調査報告書の公刊せられて其の地の遺跡に關する知見の加へられた事等は擧ぐべきである。此の前者の例として「特殊なる型式の甕棺を發見した讃岐國香川郡國座村山崎の古墳に就いて」（上原準一、考古學雜誌）は一種の箱式棺の內部に甕棺を埋葬してあつた狀態の精細な記述で、また其の遺跡としての價値を論じたものであり、大和「佐味田及新山古墳研究」（梅原末治、單行本）は從來發掘せられた我が古墳中で遺物の最も豐富な此の兩古墳に就いての綜括的の調査を錄したもの特にこれは其の示す事實に基いて兩古墳の實年代を考定して、我が國に特殊な墓制の前方後圓墳の起源と其の發達の痕を窺ひ、また局限された副葬品の性質から上代人

の有した死に對する思想の考察を試みた如き、特にそれから大和文化の起源の古きを論じて、從來の古代史觀に一の新しい見解を示す等各種の研究を含んで「晩近考古學の進運と我が古代の狀態」（同人、歷史と地理）と共に近時に於ける考古學の齎した業蹟の著しきものあるを示してゐる。

美術考古學の方面では推古時代の古瓦の綜括的研究を試みた「飛鳥時代古瓦の研究」（高橋健自、聖德太子論纂）をはじめ、「法隆寺金堂の藥師三尊像に就いて」（濱田耕作、同上）及び「中宮寺如意輪觀音像の樣式に就いて」（同人、國華）の二編を特記すべきである。就中最後の一文は此の有名な半跏思惟の像に關した形式上の新研究で、我が推古及び白鳳の兩代に限られてゐる此の樣式の彫像をすべて彌勒とすることの當らないことを擧げ、この式は本來休息安易の姿勢で、その起源はガンダラの彫像に佛陀の侍者なごを示す形として現はれ、それが三尊の脇侍ともなり、支那に傳はつて六朝代に獨立の像を生じて朝鮮を經て我が國に傳はつた事を一々遺物の上から立證して

さて中宮寺の像が一般彫像發展の過程の上から見て、半跏像中觀照の扁平性を破つた眞の彫像である重要な意義を、その全體の姿勢及び一々の細部の手法から說明して、彫刻史上に占むる位置を明にし、終りに此の像の美術上の價値を論じて、像がよく均衡を保ち、それは女性的の美しい無念至純の表情を示してゐることを歎賞して、なほ像の姿勢の觀者に親密な感を與へることをも附記してある。同じ像に就いて、多くの半跏像を樣式順に配列して、その中に含まれた刻銘あるものゝ年代から其の製代の年次を論じた「推古佛の比較研究」(仲田勝之助、中央美術)と併せて最も興味ある見解を示したものと云ひ得られやう我が國と密接な間柄にある支那方面に關した論著は、學者の彼地を訪ふ者年を追ふて多くなる結果として種々のものを見たが、古美術に關するものゝ特に多かつたのは其の目的の然らしむる處で、中に「天龍山石窟」(關野貞、國華)の樣な北齊から隋唐に亙る優秀な彫像を世に紹介された權威のある報告を見た。そして其の考古學の分野でも昨年は比較的著しい調査研究の公にせられた。今まで其の二三を擧げるならば滿洲での「遼陽太子河附近の壁畫ある古墳」(塚本精、考古學雜誌)「旅順刁家屯古墳調査補遺」(濱田耕作、東洋學報)をはじめとして「支那古銅器研究の新資料」(同人、國華)の重要な研究があり、また「殷虛に就て」(內藤虎次郎、考古學雜誌)、「六朝の土偶」(濱田耕作、同誌)及び「唐代服飾の研究」(原田淑人、東京大學紀要)を數へ得る。「支那古銅器研究の新資料」は新に京都大學の所藏に歸した殷墟の發見と云ふ時樣の器の一部と思はれる象牙の彫刻板　象牙の柄頭、骨製魚形裝飾品及び白灰色の方斜雷紋のある土器片を基とした研究で、先づ一々に就いて詳細な記述を試みて後、是等の遺品が何れも周若しくはその以前と認めらるゝ手法を有するを擧げ、支那銅器上に特殊の發達を示した饕餮、雷紋等は本來は木版骨角上に刻まれたものから來たので、野蠻模樣の範疇を脫せない、これは大洋洲の文樣の特色を示すものであるとのフエノロサの說に贊して、如上の骨角器の紋樣はその過程を示すもの、古代の雕人なる者は此の骨角の細工に從ふ類を指したのでないかと疑ひ、白色土

器の雷紋は象牙のそれと密接な關係のあることから、從來知られた眞色の漢以前の土器の外に新に此の優秀な形式が貴族式又は禮器として行はれた事實を認めて、周禮考工記に見ゆる陶旊の二工は此の兩者の土器製作を分掌したものと見らるゝのを遺物の上から考定してある。そして最後に支那三代の古銅器に特殊な饕餮、虺龍、雷紋に就いて、其の起源は饕餮は人面から、また虺龍は獸形に基くが漸次變化して雷紋となつた發達の痕を考へ、周以前かと認められる骨角器及び土器に見えた其等の紋樣の既に本來の意味を著しく遠ざかつてゐるのは其のこゝに至る發展の長い歷史を豫想せしむると論じてある。從來殆んど世に知られなかつた新資料に依つて支那銅器の研究の新生面を開き、併せて考古學上から支那の古代の狀態を明にせんとした處注目に値する。

最後に考古學に關係ある補助學科の諸研究中、上述の「唐代服飾の研究」は風俗史上の一勞作で、其の考察の比較資料を唐代の土偶に求めた處に特色があり、土俗學及び工藝史の兩分野では、前者に「各地のわらやね」（高田十郎、奈良）、後者に「磬」（香取秀眞、單行）の共に貴重な資料の集成の公刊があつた。金石學の方面にては「新羅眞興王巡狩管境碑考」（今西龍、考古學雜誌）、が碑の沿革から從來の研究を集成して、更に銘文に關した該博な考證を試みて、從來一部學者の疑問とした黃草嶺碑の確なことを斷ぜられてゐる。蓋し最も注意すべき論文たるを失はない。「法隆寺寶物の銘文」及び其の補遺（高田十郎、奈良）また正確な報告の一として擧ぐべきである〔梅原〕

●地理學界

概觀昨年の地理學界に於ける事業の中第一に注意すべきものは各方面の探檢事業であつて、其一は The Mount Everest expedition の壯擧でさる。これは英國王立地學協會の計劃にかゝるもので昨年三月七日 Colonel Howard-Bury を團長として地質學者博物學者等多人數の一隊を派遣する事を發表したが一行は五月十八日に印度「ダージリン」に達し、六月西藏に入り其後地圖上に明かになつてゐない地域を跋涉した。豫定は二年間の繼續事業であつて費

用一萬磅を超過するこの事である Geo. Journal の十月號には探撿地方の略圖ここの未見の地方の雄大な風景の寫眞が十四頁に亘つて出てゐるが同じく十二月號には昨年度内の豫定計劃が無事結了したこの報告が載つてゐる。其れによるこ非常に困難な探査をへてMallory 及 Bullock の兩氏はこの世界最高峰の頂上に登攀し得べき地點をこの山の東北端に定むることが出來た。其所は頂上から猶六千呎の下にあるけれどもこゝから頂上に達するには最早大なる困難がないこの事である。次に印度測量局の Morshead 及 Wheeler の兩氏はこの山岳地方一三、〇〇〇平方哩の廣さに互れる測量を遂行し且多くの寫眞を撮つた外に Wollaston 氏は動植物の採取に從ひ Dr. Heron 氏は Brahmaputra 川とこの山脈この間の地質調査を行ふたこの事である。費やす所印度政府の支出を除いて既に五千磅を支出したこの事である。Geo. Journal の十二月號にも美はしき寫眞が出てゐる中にも今所探撿せられたるBangbuk氷河の寫眞は實に卷中の異彩である。引きつゞいて本年は四月二十一日にダージリンを出發して五六月、登山の好季にこの最高の頂上を極めるこの事である。吾人は今からこの壯擧の成効を期待するものである。次ぎは極地探撿の成績である。其の一であるアムンゼンの北極地方の引つゞいての探撿は田中阿歌麿氏の紹介(地學雜誌)に讓りてのべないアムンゼンこ同じやうに此極圏内に活動せる人にStefansson氏の加奈陀北極探撿がある(Geo. Journal 十月號) 氏はさきに一九〇六年から七年に第一回の北極地方探撿に成功した經驗から「エスキモー」を雇備するこなくして主こして白人の手によりて加奈陀北方の多島海地方の科學的探撿を企てたが幸に加奈陀政府の後援を得て之を實行し多數の少壯學者を伴ひBanks island, Prince Albert land 北岸の地形を實測して從來の地圖を訂正し得たるのみならず更に北方八十度三十分西經百十二度の地に達して三個の新しき島を發見し、同時に從來無視閑却されてゐた此地方の價値の大なることを世間に紹介し理學並に地理上の効績が顯著であるこいふ廉で昨年 Founder's medal を王立地學協會から授與されたのである、猶氏は一九一二年以後更にこの方面の未探撿地域を調査するこの

ことである。最後に注意すべきは昨年九月十七日 Quest 號に搭乘して倫敦を經纜した Schakleton 氏の第四回の南極探撿である氏は一九一五年の探撿にウェッデル海からロッス海へ横斷を企てゝ失敗したから今度は亞非利加の「ケープタウン」を出發點として南極大陸の周航と Avro 號なる飛行機による極地横斷とを企てたものが不幸にして本年一月其の中途に於て夭逝した。實に極地探撿の勇將を失ふたことは誠に痛恨に堪へない次第である。Debenham 氏の「極地探撿の將來」(Geo. Journal) といふ論文はこの際更に一讀の必要があると信ずる。次に英國王立地學協會は紹介すべき猶一つの事業をしてゐる。それは一九一九年七月陸軍少將 Edward Gleichen を主査とせる「地名常置調査會」の成績である。この會は爾來拾八ケ月を經過して昨年一月に至り其會で定めた綴字標準を「RGS」第二式として發表した。こゝに第二と云つたのは一八六五年にも同樣の計畫があつて外國の地名を綴る標準を定め一般に之をRGS式と呼んでゐたからである。ところが其會は昨年七月に至つて其の第一集を發行した。それは約八頁の薄

いものであるけれども亞細亞の地名表であるから我々には特に興味をひく點が多い今其一例を擧ぐれば

Honshu; Japan; Jap 本州 (not Houshiu, Hondo, Nippon)
Kyoto; Japan; Jap 京都 (not Kioto)
Kyushu; Japan; Jap 九州 (not Kiusiu, Kiushu)

の類である、之を一見してもわかるやうに其地方々々の發音にいかに注意してゐるかゞわかる。地名は實に氣紛れに出來たものでなく必ずや深い地理的歷史的の因緣を持つたものである以上永遠に尊重すべきものであることは云ふまでもない事である。然るに我國では地名の變更といふ事を無暗にやる弊害があつて近來各所に明治とか大正とかいふ村名が頻出するが嘗ては樺太領有の際に近藤岬とか重藏岬とかいふ珍名目をつけて取消した失敗があるにも不拘昨年七月には又々臺灣に於て地名を無雜作に變更して二字に切り詰めを行つた其結果として打猫街を民雄（タミヲ）、田中央を田中（タナカ）、打狗を高雄（タカオ）なぞゝ日本讀にもぢつたものさへ出來るやうになつた。特別の理由なくして艋舺（マンカ）を萬華（マンカ）と改めたやうな類が甚だ多い。從つて目下新舊地名對照表をつくつて自他共にいらぬ手數をふやして

るるのである。朝鮮などにも同樣の類例があるこふいふ事は今後大に注意して苟くも傳來の地名を變更せしめざるやうにせなくてはならぬ。

それから轉じて學說の方面を一瞥してみる。獨逸は戰後の疲弊にも不拘昨年度には Karl Andree 氏の經濟地理の第四卷 Wagner 氏の歐州地理總論などいふ浩瀚なる著述が出版された外に各種の地理書の改版が出てゐる誠に盛んな事ではあるが一般に製本が悪くなり紙質印刷共に粗雜で戰前のものとは比較にならない點は痛嘆すべきであるがそれでも Mitteilungen には堂々たる大論文がのつてゐる卽ち Köppen 氏の「陸塊の移動と地軸變化との原因と其結果」といふが如きは慥かに其の一である。

この論文は今日世界各地で行つてゐる緯度觀測の結果明になつてゐる地軸の變動といふことよりも更に大規模なる移動が地質時代にあつたものだといふ地質學上又は生物學上の學說を根據として其原因を陸塊の變動に求めたものである蓋し地殼の下層は塩基性の物質から成立してゐて上層には酸性の物質から成立つ所の陸塊を有してゐるがこの上下の間に比重の差がある、然してこの下部の地核は其成分が全體として均一であり得ないから物質の移動を起す事がある。この下部の移動に伴つて上部の陸塊が自ら諸種の變動をうける、地質時代に於ける大陸分布が現在と異つてゐる原因もこれによるのである從つてこの內部物質の移動に伴つて回轉體たる地軸の運動は自ら變動すべきであると論じたものである。これ迄はこの地殼下部物質の移動について山脈の成因を論じたり又は地震の原因を論じたものはあるがそれを地軸運動の變化に迄擴げて考へたのは氏に始まるといつてよろしい。實はこの地球內部の考察といふ事は最近の地理學界に於ける新傾向であるので小藤博士が Oldham 氏の「斷層」(地質學雜誌)を紹介して今や山脈生因論は革命時代にあると述べて居られる通りである。同博士は又、加州大地震の原因についての最新說を紹介して(地質學雜誌)地殼表部と其內部の層、所謂 Haxford's Zone of Compensation を略述せられ其地球內部の物質移動のために之に浮乘せる陸塊の一部が偏壓をうけて Strain を起し其の偏壓態が蓄積して

遂に彈力の限界を越え地上を越す際に伴隨現象として斷層や地震現象が生ずるとのべられてゐるが Kuppen 氏の前論文を併せ見れば參考となると思ふ。實にこの地殼下層の物質移動と其結果に關する議論は現今地理學界の議論の焦點であるのであるが今其一例として Furrard 氏の「山脈の成因論」(Journal) を擧げるのも無用ではないと信ずる。氏の所論をのべてみると、氏曰く、山嶽の成因は從來 Contract on The ry が重ぜられて居つて地球の冷却收縮するこの爲めに横壓力によりて地皮が皺曲するそれが山脈だといふ事になつてゐる、所が西藏では一萬五千呎の高所で泥土の水平に堆積した地層の中から犀や象の化石が發見された。これはこの象や犀がもと海面と同じ高さの熱帶沼澤地に居つたが其以後こゝまで推し上げられたものであつて其地層は水平であるから側壓力をうけたものとは見られない又西ガーツ山脈にも同樣に水平の地層がある。勿論「ヒマラヤ」や「アルプス」の側面には地皮皺曲の證左になる地層はあるが、それだからというてこの中央部の水平地層が側壓力の結果推し上げられたのであるとは解釋されにくい。凡そ山脈の成因を考へるに際しては單に物理學的方面のみから見ずに地下に於ける岩石の化學的成分の移動といふ事を考へねばならぬ。之を「ヒマラヤ」の場合に見るに山脈の中央部はすべて花崗岩から成立してゐるがその山脈帶とその外側に於ける陷沒平原帶との間には凡四十哩の幅の中間地帶があつて其の部分に於てのみ地皮の皺曲が見られる皺曲によつて大山脈が出來たのではなくこの大山脈と陷沒地との地下に於ける岩石の undertow による結果、岩石が膨脹して、垂直に推し上げられたるものが山脈である、皺曲はその押し上げた際に出來た第二次の現象であるといふのである云々この論は主として、著者が「ヒマラヤ」地方研究の上からの立論であつて世界のすべての山脈に亙つて考へられたものでないから說の當否は今暫らくこれを論ぜずとしてたゞこういふ風の考へ方が、目下の學界に流れてゐるといふ事を紹介するに止める。

次に紹介すべきは Wüsche 氏の疾病の地理的分布 (Mitteilungen 三月號以下) といふ論文である。これも本年の

地理學界に於ける新らしい貢獻である氏の論文は、虎列拉、ペスト、原生蟲病卽マラリア、黑水病、假性白血病、東邦腫瘍、赤痢、肝臟膿瘍、アフリカ睡睡病、スピロヘタ病黃熱、靜脈熱、デングー熱、ペルー傳染病、スプルーエ、脚氣、伊太利亞癩病、ペラグラ細菌病(レプラ、モールタ熱)菌病(チネアインブリカータ、ピント病)腸虫病(フイラリオーゼ、十二支腸虫病)メヂナ病、ビルハルツ氏住血虫病、肺ヂストマの諸病につき世界輿圖四枚に分布範圍を示めすと共に疾病の地理的分布を起す最も有力なる原因は交通であると述べ特に現今の世界交通は疾病の移動を容易ならしむものであるとて「ペスト」以下多くの病氣の例をあげて論ぜられてゐる。この論文の出たこゝ丁度時を同くして我國にては宮川末次郎氏の「世界に於ける風土病の分布に關する概念」(地學雜誌四月號)といふ論文が發表された。氏は風土病の分布に關して地理的影響を述べられたが第一に風土病と氣候との關係第二に土地の文野が風土病の分布に及ぼす影響第三に中間宿主と風土病の分布、第四に風土飲食物の相違による地方的の風土病、第五に分布理由の各項目について例をあげて細說し、風土病分布の人爲的に變化し得られるといふ事を力說してある。この兩論文を併せて讀まば日本人のごとく日本を以て氣候のよい、健康地と誤認して、不養生をしてゐるもの共には大なる敎訓を與へるであらう。

以上は讀過したものゝ中で氣づいたものを擧げたのであるから多くの見のこしがあるのは言を俟たないことで、粗漏の罪免がれがたい點は切に讀者の寬恕を乞ふ點であるが、最後に昨年に Brunhes の人文地理學が今度英譯せられて出版された事を附記したい。佛語の原著よりは百四十頁も少く且本の形が小さいけれども要領をうるには便利である。この書によつて我國の地理學界に於ける人文地理の研究が新らしい「ヒント」を得んことを望んでやまぬ。

轉じて我國の地理學界に於ける昨年の業蹟を見ると敎科書の方面には新らしい世界の改造に關して自から改版せられたるものが多く單行本としては小林房太郎著日本の火山あり早阪一郎著の地史學概論あり山邊平助著地理敎

授の革新などがあつてこりゞに著者努力の跡見るべきものがあるが、いづれかと云へば寂莫の感がないではないけれども論文の方面では地理の專門雜誌以外に就て各種の雜誌の中に極めて眞面目な地理學的研究の發表せれらてゐるのを見るは大に人意を強くするに足りると思ふ。

今各部内に分ちて大體に之を列記して見る。

數理地理の方面に於ては　「日光及日時計の作り方に就て」(中島外吉、建築雜誌)がある、日の長短、太陽に對する地球の運動、日光の高さの算定、其他を詳論し我國にある五個の標準時を說明し併せて東京に於ける日影圖、及時刻表を附けてゐる。外に「星雲說に就て」(國枝元治、地學雜誌)がある。自然地理の方面に就ては「ブラッキストン氏線は地學上果して其意味を爲すか」(八田三郎、地學雜誌)は特筆すべき論文の一である氏は樺太北海道及本州に生存する動物の移動をのべて樺太から南下して北海道に入つたものは猶南下してゐる傾向があるのに反して本州から北海道に入つたものは宗谷海峽で喰ひ止められて一匹も樺太にゐない、現存せる動物から見れば宗谷海峽の方がブ

ラッキストン氏線よりも猶著しき分布區域線であるといふので、ブラッキストンの畫線は動物分布上完全なものでないことを明にしたものである、「山岳に於ける森林が水源を涵養する作用を論ず」(淵野旭子、大日本山林會報)は我國内に於ける實例に富める有益の論文である「世界石油產地の分布」(小藤文次郎、東洋學藝雜誌)は東西兩半球に於ける油田地域の地殼構造を論じて一はメキシコ海岸二は歐亞兩州の境に存することの偶然にあらざるをのべたものである、「地下水に就て」(鈴木昌吉、地學雜誌)は給水源、蒸發、吸收及滲透、水質、水温、鑿井地帶の各節に亙つて詳論し「河蝕の或型式に就て」(德田貞一、同誌)は樺太古丹川の河蝕三稜石の說明である、「太平洋の地震帶、」(大森房吉、東洋學藝雜誌)は太平洋岸の地震地域の大體論であつて「加州大地震の原因」(小藤文治郎、地質學雜誌)は同地震の原因に關する最新說の簡單なる紹介であるが前論文と併せて讀まば啓發さるゝ所があるであらう、其他に「珊瑚礁成因說の變遷に就て」(石井逸太郎、歷史と地理)「琵琶湖岸の地形に就て」(岩西忠一、同誌)「浦塩半島附近

の地質」（瀨沼恪三郎、黑龍地方研究報告第十五卷の譯）などがある、

政治及歷史地理の方面に於ては「世界改造の地理學的考察」（下田禮佐、歷史と地理）は戰後の改造地理の大體を知るに便であるが、毎號に連載せられてゐて猶本年も續く筈、「アドリアチック問題に就て」（佐藤弘、東洋學藝雜誌）と同樣この地方の地理及歷史の說明で最近の解決に及び「猶太國建設問題」（秋岡武次郎、同誌）はこの問題の最近の狀況を紹介したものである、「ハワイの話」（山崎直方、同誌）は同博士が昨年其地へ出張せられた土產話で「樺太及サハレン州とラペルーズ」（山崎直方、同誌）はラペルーズの探檢の成績をのべて間宮林藏の探檢に及んでゐる。

人文地理の方面に就ては「地質學と地理學」（小藤文二郎地質學雜誌）に地理及地質學の最近の傾向を述べて地理學は人事地理學の方面に發達し地質學も亦商業地質學及び政治地質學など新しき方面に向つて來たとあるやうに著しくこの方面が學者の注意する所となつた「戰鬪に有要なる地質學」（渡邊正三郎、地學雜誌）の如きは其一例であつて、この論文は主として軍屬地質學者の取扱ふべき問題に關して詳述してある、次ぎに最近我國の大都市が發展して都市計劃ということが當路の人の研究題目となつたと同時に世人の注目する所となつたから昨年はこの種の論說が割合に多い卽ち「用途地域程に就て」（內田祥三同誌）は都市計劃の根本問題の取扱つたものであり、「江戶時代住宅に關する法令と其影響」（大熊喜邦、建築雜誌）は同樣の原因から過去を研究した產物とみるべきで江戶の規模輪郭戶口消防制度等に亙つて論じてある「都市の立體的形態」（橋本辰彥、歷史と地理）「都市の建築材料」（同人、同誌）「都市雜觀」（同人、同誌）「市區の名稱に就て」（同人、同誌）はすべて都市に關する地理上の論說であるが「町の呼方より見たる都市の發展史」（平山常太郎、同誌）は、我國の各都市に町を、テフと呼ぶとマチと呼ぶ稱呼があるがこの兩者の間に市區建設年代の新舊があると論じたものである。

經濟地理の方面は地理學最近の傾向から最も著しく注意せらるゝ處のものであるから、この方面の報告は誠に多

い「チエッコスロヴキア共和國の經濟的價値」（田中阿歌麿、地學雜誌）「世界石油供給に關する國際的懸案」（小林儀一郎、同誌）など其一例であるが「北太平洋岸の漁業に就て」（岸上鎌吉、同誌）「歐米林業視察談」（佐々木茂枝、同誌）の如きは何れも出張視察にかゝる例をのべたもので「福島縣本郷山陶土」（北條敬太郎、同誌）「佐賀縣下の陶磁器原料」（伊原敬之助、同誌）「長崎縣蚊燒村の石綿」（同人同誌）「日本に於ける建築石材」（小山一郎、地質學雜誌）は何れも其地方の地勢産出狀況等を詳述し、「朝鮮の水産」（田子勝彌、地學雜誌）「朝鮮の産業及交通」（篠原英次郎、朝鮮）「朝鮮に於ける優良稻種普及の成績」（向阪幾三郎、同誌）は朝鮮の經濟地理に關する指針である。猶論說の中に「大戰後本邦貿易の趨勢」（野間譽雄、地學雜誌）は戰後貿易の概要を述べて我國商品の改善を叫び「貿易上より見たる日支關係」（大村欣一、東亞經濟研究）は日本の對支貿易を論じて更に我國商人に一歩を進めんことを提唱してゐる。〔藤田〕